

かくてはえすぐさじ。

(源薄雲)

かうてもおのづからわが宮などおひ出でたまはとさるべきついてもありなむ。

(源桐壺)

かうやみなんとはさりともおぼされじ。

(源花宴)

かうて見奉るにつけても夢のこゝちして。

(源玉葛)

かうても平におはしまさば。

(源柏木)

此人はかうてもやまてとかくいひかゝづらひ出んもわづらはしう。

(源夕霧)

いかてすむらむあさぢふの宿。

(源桐壺)

いかてはたかゝりけむ。

(源帚木)

いかて女官などのやうにつきなみてはあらむ。

(枕 五)

昔つれなき人をいかてと思ひわたりければ哀とや思ひけむ。

(伊勢語)

もとより思ひいたらざりける事にもいかて此の人の爲にはとなき手をいだし。

(源帚木)

いかてことごとしき覚えはなくいとらうたげならん人のつゝましき事ながらん見つけてしがな。

(源末摘花)

かちぬる心ちしていかて十五日まちつけさせんと念ずれど七日をだにえすぐさじと猶いへばいかてこれみはてむと皆人おもふほどに。

(枕 四)

いかてか俄ならんといとおいらかにいひるたり。

(源夕顔)

などてにて侍りけむ。

(宇國讓中)

などてのりそひてゆかざりつらむ。

(源夕顔)

などてその人としらせじとはかくいたまへりしぞ。

(源夕顔)

などてかふかくかくしきこえたまふことは侍らむ。

(源夕顔)

などてかあなたにかへりなばばかり侍りなん。

(源空蟬)

などてかその門せばくつくりて云々。

(枕 一)

などてかさ人けなきものはあらん。

(枕 四)

さてよめる。

(伊勢語)

さてこそとらしめたまはめ。

(竹 取)

さてはえとらせたまはじ。

(竹 取)

久しとはおぼつかなしやから衣うちきてなれんさておくらせよ。

(蜻蛉、下)

さて世にありと人にしられずさびしくあばれたらん葎の門に思ひの外にら
うたげならん人のとぢられたらんこそ。

(源 帚木)

のこりをいはせむとてさてさてをかしかりける女かなとすかいたまふを。

(源 帚木)

よととももの御物思ひなるをさてだにやみなむとふかうおほしたるに。

(源 若紫)

さても宮にはいかてつかうまつらむと思うたまふべきを。

(宇 國護、中)

とてやかくてやとよろづによからんあらましごとを思ひつゞくるに。

(源 東屋)

とてもかくても今はいふかひなきすくせなりければ。

(源 帚木)

いかになりはてたまふべき御ありさまにかとてもかくてもたのもしき人々

におくれたまへるがいみじきと思ふに涙のとゞまらぬを。

(源 若紫)

第三は助詞をうくるものなり。これまた他の複語尾になきところなりとす。

而、そは「にて」と「と」の二あり。

「と」の例。

かたときのまとてかの國よりまうてこしかども。

(竹 取)

なんぢがるゐたいの命をとゞめむとてもこの木一寸をもうべからず。

(宇 俊蔭)

あはれなんぞの人か春は花を見秋は紅葉をみるとてわれらが通ふ所なれば。

(宇 俊蔭)

うへおはしますとてかくれたるかたに侍らひたまふ。

(宇 沖つ白波)

さのたまふとて里すみをせばいまは何のかひかは。

(宇 國護、中)

更に後のあこの名をはぶくともたけき事もあらじ。

(源 明石)

げにこそ心ぼそきゆふべに侍れとても又ないたまふ。

(源 朝顔)

「にて」は文を重ねると語を重ねるとあり。

文を重ねるは

月の都の人にて父母あり。

(竹取)

大きな例のつるのほどにてしろがねをはらふくらにいさせたり。

(宇國讓上)

さしもあだめきめなれたるうちつけのすきくしさなどはこのましからぬ御本性にて稀にはあながちにひきたがへ心つくしなることを御心におぼしとどむるくせなむあやにくにてさるまじき御ふるまひもうちまじりける。

(源帚木)

御ぐしいろにて柳の糸のやうにたをたをとみゆ。

(源竹河)

髪は少しいろにてこちたうはあらず。

(狭衣三)

殿をばさるものにてうへの御すくせこそめてたけれ。

(枕六)

萬のてうどはさるものにて女はかきみすゞりこそ心のほどみゆるなめれ。

(枕九)

語を重ねるは

造麿が手にてうませたる子にてもあらず。

(竹取)

海の上になぐよへる山いとおほきにてあり。

(竹取)

變化のものにて侍りけむ身ともしらず。

(竹取)

うちより日をとりにてやぶるべきにてはあらず。

(宇沖の白波)

あやしくはかなくてうせにしはいかなることにてぞ。

(宇吹上下)

又このけさのぬしのこのかみもはふしにてあれば。

(蜻蛉上)

ましていとつれくにてあり。

(蜻蛉中)

かくて異腹の兄も京にて法師にてあり。

(蜻蛉下)

かしくにも人々のらうたきをおなじ所にてだに見奉らむときこえたまふ。

(源夕霧)

まだいといはけなくをかしげにておはす。

連體形

たゞ今までありつるをのことものかしこへいにけるかな。(宇祭の使)

ありつる事を耻しと思ふなめりとおぼして。(和泉記)

ありつる花のもとにかへりぬたまへり。

(枕、一)

あやしこのまゐりつるは誰ならむ。

(宇、初秋)

ぬれつゝぞしひてをりつる。

(古、春下)

夜もあけばきつにはめなてくたかけのまたきになきてせなをやりつる。

(伊勢語)

とくそれをなむ見給へつる。

(宇、初秋)

水見になんいて、侍りつる。

(和泉記)

已然形

たいめんせんともものしつればなどのたまふ。

(宇、あて宮)

いままで侍りぬべくおぼえざりつれど御おくりをだにつかうまつりてこそ。

(宇、あて宮)

心ときめきしつれど。

(枕、一)

よるべなみ身をこそ遠くへだてつれ。

(古、戀三)

おきつ浪たかしの濱のはま松の名にこそ君をまちわたりつれ。(古、雜、上)

(古、雜、上)

そこにまうてむとこそしつれ。

(宇、菊の宴)

これよりこそまづと思ひつれと云々。

(和泉記)

「つ」の原形を重ねて修飾格を構成すること前期の如し。但用法頗自由なり。

物ごとに秋ぞかなしきもみぢつゝうつろひゆくをかぎりとおもへば。

(古、秋、上)

をみなへしうしと見つゝぞゆきすぐる。

(古、秋、上)

花みつゝ人まつときは。

(古、秋、上)

春日野にわかなつみつゝ萬代をいはふ心は神ぞしるらむ。

(古、賀)

あふことは雲ぬはるかになるかみの音にきゝつゝこひわたるかな。

(古、戀、一)

男みこ達はいとうつくしげにかたちよく人にほめられつゝあまたもたり。

(宇、藏開、上)

いと限ありつゝ及ばざりけりや。

(源、若菜、上)

さうぞくどもいとうるはしくしつゝまぬれり。

(宇、樓上、上)

すなはち火をけくだものなどもてきつゝかす。

(枕 六)

み一つは京にかよひつゝも侍りぬべし。

(宇、國讓中)

皆馬どもひきさげなどしつゝかしてまりつゝぞをる。

(源、寄生)

内なる人ひとり柱に少しぬかくれて琵琶を前に置きてばちを手まさぐりにしつゝゐたるに。

(源、橋姫)

六七月あなじことにありつゝはてぬ。

(蜻蛉、下)

とかくなんどみつゝふるほどに。

(蜻蛉、中)

いとらうたくおぼえてかきなてつゝゐたり。

(源、若菜、下)

きこゆべきこともなくて打ちなげきつゝゐたり。

(源、夕霧)

あゆさまさまにれうぜさせていと多くごだちのまへについがさねしつゝあり。

(宇、國讓、上)

おのがじゝひきつぼねなどしつゝあめる。

(蜻蛉、上)

海づらに並びて集りたるやどもの前に船どもを岸にならべよせつゝあるぞいとをかしき。

(蜻蛉、中)

前におぼゆる事いと多かれどいともさわがしくにぎはゝしきにまざれつゝあり。

(蜻蛉、中)

つばいもちひなしかうじやうのものどもさま／＼はこのよたどもにとりまぜつゝあるを。

(源、若菜、上)

御格子どもみなあけわたし御几帳たてつゝあるに。

(宇、藏開、上)

それよりたかくもりつゝあり。

(宇、藏開、下)

女房十五六人ばかり皆こききぬをうへにきてひきかくしつゝありしなかに。

(枕 九)

別當のりしにやあそろしげなるものさげつゝあるものこそかゝるかたちはしたれ。

(狭衣、一)

「つゝあり」といふ語法は近頃の翻譯文にはじめてあらはるゝものゝ如く説く人あれど、奈良朝篇に擧げたる數多の例又上の例どもにて必しもしからぬを知るべし。「つが」と熟合したるは「たり」となる。

原形

年もよしこがひもえたり。

(拾神樂)

二十人のまうちきん達御はしのもとにたちて舞踏したり。

(宇祭の使)

そゝろさむきにうへのあこめたゞたてまつりたまへりたり。

(紫日記)

やをらさながらさし入れたりとも人のとがむべきことかは。

(枕 二)

未然形

草枕もみちむしろにかへたらば心をくたくものならましを。

(後旅)

人しれぬ心の中をみせたらばいままでつらき人はあらしな。

(拾戀 一)

これが事をきかばやとおもふにそしられたらばきかじとおぼゆるを。

(枕 六)

連用形は複語尾に接するのみ。

連體形

あれたる宿にひとりたてれば。

(古秋上)

こんごんるりして造りみがきたるおとど。

(宇吹上上)

さ思ひたまへたる事あるか。

(宇菊の宴)

はらへしたるところに松ばらあり。

(宇菊の宴)

うちあてたるはいみじうけうありとうちわらひたるもいとほはえし。

(枕 一)

吹く風をなきてうらみよ鶯は我やは花に手だにふれたる。

(古春下)

衣手ぞけさはぬれたる。

(躬恒集)

わかぬ浦にたまもなびかんほどぞうきたる。

(源若紫)

いかやうにかあひいて給ひたる。

(宇吹上上)

右近ぞみしりたる。

(枕 一)

手なが足ながをぞかゝれたる。

(枕 一)

已然形

物くはせたれどくはねば。

(枕 一)

賤しき心一つをちぐさになしていひあつめたればあるはよそもじあるははたもじなどしていひあつめたれば。

(保憲女集)

かうさくなる人なればかしこをば人にたのみきこえたれ。

(宇吹上下)

いとうとうとしくこそおぼしたれ。
風にまかする身こそうきたれ。

(宇藏開上)
(源玉葛)

へ 回想の複語尾

この複語尾は「き」にして、原形の外に連體已然の二形を具す。又古くは「せ」といふ未然形のありしなること奈良朝篇に述べたるところなるが、この期にもなほ用ゐられたるを見る。さればこの期にてはこの複語尾は次の如き形を有せるものとす。

原	形	未	然	形	連	用	形	連	體	形	已	然	形
き		せ						し			し		か

原形は終止の用をなすのみ。

みいしのはちの涙ながれき。

(竹取)

かてつきて草の根をくひ物としき

(竹取)

のほりやはしたまはぬなどきこえ給ひき。

(宇吹上上)

たゞ今は大將殿にはたひらかにおはしましき。

(宇吹上上)

殿の御きかせ給ひていみじくわらはせたまひき。

(赤染集)

未然形は接續助詞「ば」に接するもののみを見る。

世の中にたえて櫻のなかりせば春のころはのどけからまし。(古春上)

紅葉の流れざりせば立田川水の秋をば誰かしらまし。(古秋下)

梅の香のふりおける雪にまがひせば誰かことことわけてをらまし。

いつはりのなき世なりせばいかばかり人のことのはうれしからまし。(古冬)

早き瀬にみるめおひせば吾袖のなみだの川にうゑましものを。(古戀一)

おもひつゝぬれはや人の見えつらむゆめとしりせばさめざらましを。(古戀二)

わたつ海に深き心のなかりせばなにかは君を恨みしもせむ。(後戀一)
 うぐひすのこゑなかりせば雪消ぬ山里いかてはるをしらまし。(拾、春)
 子日する野邊に小松のなかりせば千代の例に何をひかまし。(拾、春)
 さよ深くねざめざりせば郭公人つてにこそきくべかりけれ。(拾、夏)
 玉鉦の道のそらにてきえにせばうきことありと誰かつげまし。(赤染集)
 なごりなくもゆとしりせば皮衣思ひの外におきて見ましを。(竹、取)
 久方の空なる月の身なせば行くとも見えて君は見てまし。(大和、語)
 あひみても別るゝ事のなかりせばかつかつ物は思はざらまし。(大和、語)
 胡蝶にてもさはれなまし心ありて八重山吹を隔てざりせば。(源、胡蝶)
 おくれじと契らざりせば今はとてそむくも何か悲からまし。(狭衣、四)
 さきにけるえだなかりせばとこなつものどけき名をやのこさざらまし。(蜻蛉、下)

其人の後といはれぬ身なりせばこよひの歌はまづぞまよまし。(枕、五)

連體形

今こむといひて別れし朝より思ひくらしのねをのみぞなく。(古、戀、五)
 こはしきのみさうしにまはしましゝ時のことなり。(枕、五)
 梨壺より奉れ給ひしこがねの瓶に。(宇、藏開、上)
 みどりなる一つ草とぞ春は見し。(古、秋、上)
 かりにや我を人のたのめし。(後、秋、下)
 なに人かきてぬぎかけし。(古、秋、上)
 よるをひるになしてなむいそぎまかてこし。(宇、吹上、上)
 左大將の春日にてし給ひしあそびなむめづらしき心ちせし。(宇、吹上、上)
 のちに人にとひてなんきし。(赤染集)
 木高き蔭と仰がれむ物とこそ見し。(古、長歌)
 時雨と共にふりてこそこし。(後、冬)
 かの御かたち身のさえなどぞ侍従の君とひとしき人になむものし給ひし。(宇、吹上、上)

已然形

我を君難波の浦にありしかばうきめをみつのあまとなりなき。(古、雜、下)

げにかひありて思ふ給へしかど云々。(宇、吹上、上)

申さむかたもおもほえずなむ侍りしかば。(宇、吹上、上)

しのびてこゝろみんと思ひしかども。(相模集)

きのよこそさなへとりしか。(古、秋、上)

人しれずこそ思ひそめしか。(拾、戀、一)

なほ思ひてこそいひしか。(伊勢語)

かくこそ思ひしか。(伊勢語)

あはれときく人の心にこそありしか。(宇、初秋)

しのびつゝ夜こそさしか。(拾、雜、戀)

「さ」は「あり」と熟合して「けり」となる。そは萬葉期には各變化、殆具はりたれど、この期には原形と連體形已然形を見るのみ。

原形

年の内に春はきにけり。(古、春、上)

櫻花年に稀なる人もまぢけり。(古、春、上)

色はかはらず花はさきけり。(古、春、下)

西の京に女ありけり。(伊勢語)

その女世人にはまされりけり。(伊勢語)

昔男武藏の國までまどひありきけり。(伊勢語)

たけとりの翁といふものありけり。(伊勢語)

竹をとりつゝよろづの事につかひけり。(竹、取)

はらたゞしき事もなぐさみけり。(竹、取)

連體形

あるじのかみのよめりける歌。(土、佐)

思ひ立ちける事ほのきける人もあべかめるに、をこなる目をもみるべかめ

るかな。(和泉記)

ざりともと頼みけるがをこなりなど。(和泉記)

家にありける梅の花のちりけるをよめる。(古、春、上)

よろづの言の葉とぞなれりける。

(古、序)

山里は冬ぞさびしさまさりける。

(古、冬)

庵主とぞいひける。

(庵、主)

その人なむものにまゐりけるときゝて。

(伊勢大輔集)

五位よりしもはしろさうちばかまをなむ賜ひける。

(宇、春日詣)

已然形

志深く染めてしをりければ。

(古、春、上)

かくても候ひけれど昔おほんことを思ひそめたまひしほどはなにこゝちか

(宇、菊の宴)

せし。

かくや姫あひ給はずといひければ。

(竹、取)

秋をおきて時こそありけれ。

(古、秋下)

雪ふりて年のくれぬる時にこそつひにもみぢぬ松もみえけれ。

(古、冬)

草ぶえをこそはふきけれ。

(宇、初秋)

まゐりけるもおはしましてこそは迎へさせおはしましてけれ。

(和泉記)

かく悲しげにこそはものし給ひけれ。

(宇、春日詣)

「けむは前期に於いて既に獨立の姿を有せりしが、この期には全く「き」に「む」の附屬せるものなる傍證もなくなりぬ。原形と連體已然の二活用形とを有す。

原形

渡るとなしにみなれそめけむ。

(古、戀、五)

なき人もおもはざりけむ。

(源、柏木)

涙川なに水上を尋ねけむ。

(古、戀、一)

おもきつみ侍りけむ。

(宇、春日詣)

いかがしけむ。

(竹、取)

連體形

變化の者にて侍りけむ身ともしらず。

(竹、取)

昔みたまひけむ人のあはれなるも云々。

(宇、國讓、上)

なかばかくしたりけむもえからはあらざりけむかし。

(枕、五)

たらちめはかゝれとしてしもうばたまのわがくるかみはなてずやありけむ。

あしからじよからむとてぞわかれけむ。

(後、雑、三)

いかなる所にか此木はさぶらひけむ。

(拾、雑、下)

みまかりもやしたまひけむ。

(竹、取)

いかてかき、けむ。

(竹、取)

ついで面白きこととや思ひけむ。

(伊、勢、語)

文の道さへやは俊蔭女子に教へけむ。

(宇、吹、上、下)

げにさぞありけむ。

(枕、二)

已然形

返しは上手なればよかりけめどえきかねばかゝず。

(天和、語)

家の内出そめけむほどはさこそはおぼえけめどかくしもてゆくにおのづか

らおもなれぬべし。

(枕、九)

あふまでのかたみとてこそとゞめけめ。

(古、戀、四)

唐衣たつを惜みし心こそ二村山の關となりけめ。

(後、戀、三)

すこし年などのよろしきほどこそかやうの罪えがたのことはかきいてけめ。

(枕、二)

ホ 設想をあらはす複語尾

この類の複語尾はこの期には「べし」「めり」「らむ」「らし」「まじ」の五あり。而「めり」はこの期に入りて榮えしものとす。

べしは形容詞と同じ形を有す。

原形

この歌もかくの如くなるべし。

(古、序)

たえぬおもひのわかすなるべし。

(六、帖)

何をしてかくおひ出けむといふかひなくおぼゆべし。

(源、帚木)

いてやかみの品と思ふだにかたげなる世をと君はおほすべし。

(源、帚木)

おろかならずちぎりなくさめ給ふ事おほかるべし。

(源、帚木)

あなくらしとて火かゝげなどすべし。

(源、帚木)

何かはあらむ物まゐるべし。

(枕、二)

かしこきたからにすべし。

(宇、あて宮)

未然形

ゆく螢雲の上まていぬべくば秋風ふくと雁につげこせ。

(伊勢、語)

まうてくべくば時々まうてこむかし。

(宇、國讓、中)

この人の御車いるべくば引き入れて御門さしてよ。

(源、東屋)

さりぬべくば明日までものとかかに物語りきこえんとあれば。(和泉語)

連用形

對面すべくたばかれ。

(源、空蟬)

又虎狼熊けたものにまじりさすらへてけたものに身をせしつべくおぼえも
しはともものつはものに身をあたへぬべくもしは世の中にいみしきめ見たまふ
べからむ時このことをばかきならしたまへ。

(宇、俊蔭)

此御にほひにはならび給ふべくもあらざりければ。

(源、桐壺)

いふべくもあらぬあやあり物に。

(竹、取)

京に御車ゐてまゐるべく人はしらせたまひつ。

(源、橋姫)

露ながら折りてかざむ菊の花老いせぬ秋の久しかるべく。

(古、秋、下)

おほやけにつかうまつりぬべく見えつるものを。

(宇、あて宮)

じちにおぼしてといめらるべくみこころとめられよ。

(宇、藏開、上)

連體形

けふはじむべき御祈りどもさるべき人々うけたまはれる。

(源、桐壺)

わび人の住むべき宿とみるなへに。

(古、雜、下)

いふべき方もなし。

(枕、三)

いふべきにあらず。

(枕、三)

君のおほせごとをばいかゞはそむくべき。

(竹、取)

やがてこのすみかに朽ちぬべきより外のゆくへもなくなむ。

(宇、俊蔭)

しろきかばねをだにみたまへむとていそぎまかるべき。

(宇、俊蔭)

からのうたにもかくぞあるべき。

(古、序)

つと思ひとりてなむあるへき。

(宇、俊蔭)

なにせむにか今またかへりたまふべき。

(宇、國讓、中)

時しもあれ秋やは人のわかるべき。

(古、哀傷)

已然形は形容詞の如くに「けれ」となれり。

すゝろなるべければきこえまぎらはしつゝなむ。

(宇、藤原君)

琴なども習はず人あらばいとよくしいづべけれど。

(落窪、一)

これよりのものとだえあらむこそ身ながらも心づきなかるべけれ。

(源、若菜、上)

曉のありさまこそをかしくもあるべけれ。

(枕、二)

からうこそあるべけれ。

(源、空蟬)

このじゅうの母こそまさるべけれ。

(宇、春日詣)

はしにこそたつべけれ。

(枕、二)

この期の特別現象たる音便はこのべしにもあらはる。即、連用形の「く」と「う」とし、連體形の「き」と「い」となしたるなり。

べう

楊貴妃のためしも引きいてつべうなりゆくに。

(源、桐壺)

車よりおちぬべうまどひたまへば。

(源、桐壺)

不動尊のいきたまへる形をもよびいてあらはしつべうたのみうらみ、云々。

(紫、日記)

命若かぎりありてとまるべうとも深き山にさすらへなんとす。

(源、總角)

いひかへすべうもあらずあさまし。

(堤中、語)

いままでかうきこえさすべうもあらざりしを。

(宇、菊の宴)

べし

ほんいのいとしづかなるべし事のかたかべし事をなむいかさまにせましと思ひ侍り。

(宇、樓上、上)

かげもみえがたかべし事など。

(蜻蛉、上)

はしたなくもあべいかな。

(源、植)

さもあべし事なれば。

(源、胡蝶)

おもへばうらめしかべい事ぞかし。

(源胡蝶)

皆物きよけにけはひことなべいものとのみ。

(源御幸)

いかなべい事ぞとも。

(源御幸)

命こそかなひがたかべいものなれ。

(源落標)

かひなかべい事なれ。

(源楨柱)

おのが心をもちゐん事はかたかべいわざを。

(紫日記)

この期には又「べら」べみといふあり。「べみは前期よりあるものなり。

いてていなば限りなるべみ。

(伊勢語)

さほ山の柞のみぢちりぬべみよるさへみよとてらす月かげ。(古秋、下)

玉くしげあげば君が名たちぬべみ夜深くこしを人みけむかも。(古戀、三)

色にいてば人しりぬべみ墨ぞめのゆふべになれば。(古長歌)

身のうさをしればはしたになりぬべみ思へば胸のくだけのみする。

(伊勢集)

道芝もけふははる／＼あをみ原さりゐるひばりかくろひぬべみ。

(好忠集)

この「べみ」は擬古のものと見ゆ。當時の散文には更に見えざるなり。

「べら」は延喜前後の流行語と見ゆ。次にその例と作者とをあぐ。

峰高き春日の山にいづる日はくもるとききなくてらすべらなり。

(古賀典侍藤原よるかの朝臣)

あとば山こたかくなきてほととぎす君がわかれをしむべらなり。

(古別貫之)

遅くいづる月にもあるかなあしひきの山のあなたも惜むべらなり。

(古雜上、讀人不知)

今いく日はるしなければうぐひすものはながめておもふべらなり。

(古物名、貫之)

おもひは今はいたづらになりぬべらなり。

夏むしを何かいひけむ心からわれもおもひにもえぬべらなり。

(古長歌、讀人不知)

見てもまたまたもみまくのほしければなるゝを人は厭ふべらなり。

(古戀、五、讀人不知)

山高みみつゝわがこしさくら花風は心にまかすべらなり。(古春、下、貫之)
花の中めにあくやとてわけゆけば心ぞともにちりぬべらなる。

(古、物名、聖實)

風ふけば波打つきしの松なれやねにあらはれてなきぬべらなり。

(古戀、三、讀人不知)

木にもあらず草にもあらぬ竹のよのはしに我身はなりぬべらなり。

(古、雜、下、讀人不知)

なには濁ちふる玉もをかりそめのあまとぞ我はなりぬべらなる。

(古、雜、上、貫之)

なきとむる花しなれば鶯もはてはものうくなりぬべらなり。

(古、春、下、貫之)

風の上にあるかさためぬちりのみのゆくへもしらすなりぬべらなり。

なげきをばこりのみつみてあしひきの山のかひなくなりぬべらなり。
(古、雜、下、讀人不知)

秋の夜の月の光しあかければくらふの山もこえぬべらなり。
(古、雜、體、讀人不知)

ちはやぶる神のきりけむつくからにちとせのさかもこえぬべらなり。
(古、秋、上、元方)

久かたの中に生たる里なれば光をのみぞたのむべらなる。
(古、賀、遍昭)

久方の天つ空にもすまなくに人はよそにぞおもふべらなる。
(古、雜、下、伊勢)

春のきるかすみの衣ぬきをうすみ山風にこそみだるべらなれ。
(古、戀、五、元方)

いづくにか世をばいとほむ心こそそのにも山にもまどふべらなれ。
(古、春、上、行平)

(古、雜、下、素性)

枝も葉もうつろふ秋の花みればはてはかげなくなりぬべらなり。

(後、秋、下、忠行)

山風のふきのまにまにもみち葉はこのもかのもにちりぬべらなり。

(後、秋、下、讀人不知)

長月のあり明の月は有りながらはかなく秋はすぎぬべらなり。

(後、秋、下、貫之)

わがこひのかすにしとらば白たへのはまのまさこもつきぬべらなり。

(後、戀、二、棟梁)

かざせども老もかくれぬこの春ぞ花のおもてはふせつべらなり。

(後、春、下、躬恒)

君がゆく方においてふ涙川まつは袖にぞながるべらなる。

(後、別、讀人不知)

なかなかにおもひかけてはから衣身になれぬをぞうらむべらなる。

秋霧の立ちしかくせば紅葉はおぼつかなくてちりぬべらなり。

(後、戀、四、讀人不知)

あし引の山下水はゆきかよひことのねにさへながるべらなり。

(後、秋、下、貫之)

いとほるゝ身をうれはしみいつしかとあすか川をもたのむべらなり。

(後、夏、貫之)

秋の夜の長さわかれをたなばたはたてぬきにこそ思ふべらなれ。

(後、戀、三、伊勢)

もみちはにたまれる雁の涙には月のかけこそうつるべらなれ。

(後、秋、上、躬恒)

汐のまにあさりするあまも己がよゝかひありとこそ思ふべらなれ。

(後、秋、下、讀人不知)

久方の月をさやけみ紅葉はのこさもうすさもわきぬべらなり。

(後、戀、三、長谷雄)

君こふる我も久しくなりぬれば袖になみたもふりぬべらなり。

(拾雜、秋、讀人不知)

春くれば山田の氷うちとけて人の心にまかすべらなり。

(拾戀、五、讀人不知)

あさなあさなけづればつもるおちかみのおもひみたれてはてぬべらなり。

(拾戀、一貫之)

ふる里に咲くとわびつるさくら花ことしぞ君にみえぬべらなる。

(拾雜、春、藤原忠房)

春かすみたつあかつきをみるからに心そ空になりぬべらなる。

(拾別、讀人不知)

花もみなちりぬるやとは行く春のふるさとこそなりぬべらなれ。

(貫之集、拾春、貫之)

今年よりちとせの山はこゑたえず君がみよをぞいのるべらなる。

(拾神樂歌、能宣)

古き歌にかずはたらでぞかへるべらなるといふ事をおもひいてて。

(土佐)

見わたせば松のうれ毎にすむつるはちよのどらとぞおもふべらなる。

(土佐)

はぐくみし君を有明になしてより大空をこそたのむべらなれ。
なべて人結ばぬさきの花すゝきかぜにのみこそみだるべらなれ。

(重之集)

遠く行く君ををしむと人もみなほとしきすさへなきぬべらなり。

(重之集)

君をおもふ涙おちそひこの川のみきはまさりてなかるべらなり。

(貫之集)

川べなる花をしみれば水そのかげもともしくなりぬべらなり。

(貫之集)

人もなき宿ににほへる藤の花風にのみこそみだるべらなれ。

(貫之集)

冬すぎばなげおかれなむものゆゑに君が手にはたなるべらなり。

(躬恒集)

ふる里をわかれてさける菊の花たひらかにこそにほふべらなれ。

(六帖六貫之)

秋すぎてのこれる色も神無月霜をわけてぞ惜むべらなる。

(玉葉冬延喜御製)

しほがまのいそのいさを包みもて御代のかずとぞ思ふべらなる。

(玉葉賀忠峯)

君ひとりとはぬからにや我宿の庭もつゆけくなりぬべらなり。

(續後拾遺雜中宗子)

「べしはあり」と熟合して「べかり」となる。

原形の例は發見せず。

未然形は複語尾に接せるもののみを見る。

かやうなるやこれにかなふべからむ。

(古序)

ゑんずべき事をば見しれるさまにほのめかしうらむべからんふしをもにくからずかすめなさば。

(源帚木)

人の命久しかるまじき物なれどのこりの命一二日をも惜まざばあるべからず。

(源手習)

連用形も亦複語尾に接するもののみを見る。

あひみずばこひしき事もなからましおとにぞ人をきくべかりける。

(古戀四)

一つ二つのふしはすぐすべくなんあべかりける。

(源帚木)

連體形已然形の用例を見ず。

「めり」は原形と連用形、連體形已然形とを有す。

原形、終止に用ゐるのみ。

立田川紅葉みだれて流るめり。

(古秋下)

浪の花沖からさきてちりくめり。

(古物名)

みなかみしもの人もいふめり。

(後雜四)

こまやかにかきたまふめり。

(源、明石)

けさみればあまの小舟もかよふめり。

(重之集)

あとのかたによりていふめり。

(枕、二)

それよりのちはつぼねの籠うちかづきなどしたまふめり。

(枕、三)

連用形は複語尾に接するのみ。

尼ぎみそのほどまでながらへたまはなんとのたまふめりき。(源若菜、上)

院のうたなめりき。(宇、嵯峨院)

一日なむおほんはらへやがて夏の御かぐらせさせたまふめりし。

物をのみおぼすめりしかど。(宇、祭の使)

さねかたの君に人の語り給ふめりしかば。(源、蜻蛉)

連體形 (小大君集)

ぬるめる人にきせてかへさむ。

こがらしにふきあはすめる笛のねを。(伊勢、語)

(源、帚木)

嵐のみふくめる宿に花薄ほに出てたりとかひやなからむ。(蜻蛉、上)

人しれぬ人まぢかほに見ゆめるはたがたのめなるこよひなるらむ。(拾、雜、戀)

世の中は浪のさわぎに風ぞしくめる。(古、雜、下)

花すゝき君がかたにぞなびくめる。(大和、語)

その事をなんかしこにもいとみじくなげかるめる。(落窪、四)

もの思ひのもよほしになんよはひの末におもひ給へなげき侍るめるときこ

えたまふ。(源、若紫)

已然形

徒に度々しぬといふめればあふには何をかへむとすらむ。(後、戀、三)

うぐひすだに見すぐしがたげにうちなきてわたるめれば。(源、早蕨)

見る人もいとあはれにわするまじきさまのみかたらふめれど人の心はそれ

に従ふべきかと思へば。(蜻蛉、上)

たゞいまの天子にこそはおはすめれ。(宇、嵯峨院)

あまたの中に一人こそは天子のおやともなるめれ。
なほこそものせらるめれ。

(宇、嵯峨院)
(宇、嵯峨院)

この複語尾は、萬葉期には唯一つ存するのみ。しかもそれはた多少の疑を容るべき餘地あり。従つて、こは殆全くこの期のものとすべく、しかして又この期以後には漸次衰廢に傾けるものなり。

この複語尾成立の原由明に知ること難し。されどその意義よりいへば、「べし」の幹音「へ」に關する所あり。又形體上「有り」の退化せるものの融合せること明なれば、畢竟「べ」と「あり」との熟合なるべく思はる。而、その意義はこの熟合を下に心えて見るときは誠に明なるものとす。

「らむ」は原形の外、連體、已然の二活用形を有す。
原形は終止としてのみ用ゐらる。

春かすみ何かくすらむ。
片岡の朝の原はもみぢしぬらむ。
秋はつる色のかぎりをみするなるらむ。

(古、春、下)
(古、秋、下)
(後、秋、下)

殿にもさうようものせしめ給ふらむ。
ほととぎすのかけにかくるらむとおもふにいとをかし。

(宇、沖つ白波)
(枕、三)

連體形

思ふらむ事はしられて。

(宇、祭の使)

さきさき見給ふらむ人のやうにはあらじ。

(和泉、記)

誰ぞかくいふらむは。

(宇、藤原、君)

春たつけふの風やとくらむ。

(古、春、上)

蓮葉のはひにぞ人は思ふらむ。

(後、雜、一)

いづくへかものしたまふらむ。

(宇、吹上、上)

あが君やなどかかくてはこもりおはしますらむ。

(宇、吹上、上)

已然形、前提的用法としては「ど」にもに接するのみ。

色も香も同じ昔にさくらめど年ふる人ぞあらたまりける。
みそかにおもひていふらめども云々。
ちゝの色にうつるふらめどしらなくに心し秋のもみぢならねば。

(古、春、上)
(枕、二)

(古戀、四)

又係助詞「や」に接して反語をなすことあり。但、こは歌にのみあり。

あさちふのをのゝしのはらしのぶれど人しるらめやいふ人なしに。

(古戀、一)

かりこもの思ひみだれてわがこふといもしるらめや人し告げずば。

(古戀、一)

津の國のなにはのあしのめもはるにしげきわが戀人しるらめや。

(古戀、二)

おもひいでゝこひしきときは初雁のなきてわたると人しるらめや。

(古戀、四)

終止として用ゐられたるは次の如し。

こまなへていさみにゆかむ故郷は雪とのみこそ花はちるらめ。(古、春、下)

立田ひめたむくる神のあればこそ秋のこのはのぬさとちるらめ。

(古、秋、下)

浮めのみ生ひて流るゝうらなればかりにのみこそあまはよるらめ。

あさみこそ袖はひづらめ。

(古戀、五)

大原やをしほの山もけふこそは神代の事もおもひいづらめ。

(古、雜、上)

國王こそおほしきすまひはし給ふらめ。

(宇、吹、上)

「らしは原形の外、連體已然、二の用法を有す。但、形は變ることなし。

原形

みよしのの山の白雪つもるらし。

(古、冬)

神なびのみむろの山にしぐれふるらし。

(古、秋、下)

をとめこそ神さびぬらし。

(源、少女)

連體形

おく山の雪げの水ぞいままさるらし。

(古、冬)

ふる雪はかつぞけぬらし。

(古、冬)

うぢ人のまとゐる今日は春日野の松にも藤の花ぞさくらし。(宇、春日詣)

已然形

ぬきみだる人こそあるらし。

(古、雜、上)

松のねに風のしらべをまかせては立田ひめこそ秋はひくらし。

(後、秋、上)

秋の夜は露こそことに寒からし。

(古、秋、上)

霜のたて露のぬきこそよわからし。

(古、秋、下)

無限久命有志波此島爾許曾有介良志。

(續後紀、十九、長歌)

前期には「らしき」といふ形ありしが、この期には「らし」といふ形のみとなれり。しかのみにあらず、この「らし」も歌にのみ見えて、散文には「さ」を「見えぬ」を以て考ふれば、こは當時活勢を失ひて、僅に形骸を律語に止めしものにあらざるか。

「まじ」はその變化完し。

原形

めづらかなる事とも心もおどろくまじ。

(源、帚木)

猶えおぼしすつまじとおぼすべし。

(和泉、記)

未然形」とともに接する例を知らず。

この人えまぬかれたまふまじくばあのをころしたまへ。(宇、國讓、下)

連用形

げにえたふまじくないたまふ。

(源、桐壺)

えしもたへ給ふまじく思ほゆればなり。

(宇、たゞこそ)

御身を心にえまかせさせ給ふまじく。

(源、若菜上)

えみすぐすまじくおもほえつるを。

(宇、祭の使)

えたふまじくもあるかな。

(宇、祭の使)

えたいめん給はるまじくこそありけれ。

(宇、吹上、上)

連體形

さらにたがへきこえさすまじき由をかへすく聞えさせ給ふ。(源、櫛)

人の命久しかるまじき物なれど。

(源、手習)

出て給ふまじき日にやありけむ。

(落窪、二)

かなふまじきものなりとて。

(宇、俊蔭)

かならずもるまじきはいとかたしや。

(源、帚木)

こよひは一條にわたらせ給ふまじきにや。

(宇、たゞこそ)

われもよにえあるまじきなめり。

(源、夕顔)

此をさなき者はこはく侍る者にて對めんすまじきとまうす。

(竹、取)

これにまざるをりなむ侍るまじき。

(宇、藏開、上)

さはおもへどえぞあるまじきや。

(宇、菊の宴)

已然形

尼になりても殿の内ははなるまじければ。

(落窪、一)

冬の寒くなるまゝにはさもえすまじければ。

(宇、俊蔭)

さらに心にては夢にてもおろかなるまじけれどまゐりこむことのわりな
るべきこと。

(宇、俊蔭)

さるはこの君のかたちはかくかしづき給ふ御女どもよりもおとるまじけれ
ど。

(落窪、一)

おのが親の上をかく申すまじけれど。

(宇、たゞこそ)

此度こそ身はいたづらになるともえ思ひしのぶまじけれど。

(宇、祭の使)

さてのみはえこそあるまじけれ。

(宇、祭の使)

あごはらうたけれどつらきゆかりにこそえ思ひはつまじけれ。(源、空蟬)

「まじくは音便にてまじう」となることあり。

えうまじうなり。

(伊勢語)

えうけたまはりすぐすまじうなむ。

(宇、菊の宴)

さて里住はえ物すまじうこそ物すめれ。

(宇、菊の宴)

かたくもおはしますまじう云々。

(源、神)

そのものともみゆまじうしたてるやうだいの。

(源、少女)

「まじき」を「まじい」といふ事は當時なほなかりしが如し。

「まじ」と「あり」と熟合して「まじかり」となる。但、こは未然連用の二變化が複語尾に
接せるもののみを見る。

みかどにて子をもたらむもめてたくもあるまじからむ。

(宇、樓上、下)

まゐるまじかりしをせちにのたまひしかば。

(宇、俊蔭)

なほえあるまじかりければ。

(宇、春日詣)

なき跡まで人のむねあくまじかりける人の御覺かな。

(源、桐壺)

多かる中にもえなむ思定むまじかりける。

(源、帚木)

チ 複語尾相互の承接

今こゝには複語尾相互の承接状態をとかむ。

複語尾中、屬性を助くるものと統覺を助くるものとは分ちて説くべきこと前編に異ならず。

屬性を助くる複語尾は互に相助くることあり。

一、状態性の複語尾は下に發動性の複語尾を伴ふことあり。この時は「しむ」はその例を見ず。而、その「さす」も敬意をあらはすものに限り。

若宮の御まみの美しさなどの春宮にいみじう似奉り給へるを見奉り給ひても先戀しう思ひいてられさせ給ふに忍び難くて参り給はむとて。(源、葵)

今上の一宮まだわらははにておはしますが御をちの上達部などのわかやかにきよげなるにいだかれさせ給ひて。(枕、五)

例の罪さり所なく涙さへおちて人にもとがめられさせ給ひぬべきまぎらはしに。(狭衣、四)

二、發動性の複語尾は「しむのみ」状態性の複語尾を下に伴ふ例あり。但下なる「らる」は又敬意をあらはすに用ゐらる。

(宇、藤原君)

かくせしめられたる事あるまじき事なり。

屬性を助くるものゝ下に統覺を助くるもの附屬すれど、統覺を助くるものゝ下に屬性を助くるものゝ附屬せぬは前期に異ならず。

状態性間接作用の複語尾に附屬するもの。原形に

(ベシ)臨時のまつりのまひ人などおもひいてらるべし。

(枕、二)

おとゝをあるやんごとなき所にとりこめらるべしとや。

(宇、藏開、下)

(拾、雜、賀)

おはしますすべき所にこれかれものせらるべければとてすゑたてまつれり。

(宇、國讓、下)

(宇、藏開、下)

(宇、藏開、上)

(宇、菊の宴)

(落窪、四)

(宇、嵯峨院)

(宇、藏開、下)

(宇、沖つ白波)

(宇、國讓、中)

(宇、國讓、中)

(宇、國讓、中)

(落窪、二)

(ベカリ)こゝにぞまかてらるべかりけれ。

(メリ)かのおのが琴こゝにえうせらるめり。

左大將殿ばかりぞかたち心めやすくまうのほりなどもしばしばせらるめり。

其事をなん彼處にもいといみじく嘆かるめり。

なほこそものせらるめれ。

(ラム)云々かうおほせらるらむ。

里よりまちどほなる心ちせらるらむものを。

今はかうてもものし給ふぞたびのやうにもおもほさるらむ

おそろしとこそおぼさるらめ。

(ラシ)の接せる例を知らず。

(マジ)今日の事はもはら情なくはせらるまじ。

(落窪、二)

親しろしめしなばゆるさるまじく侍りしかば。
こを尋ねらるまじきものなり。

(宇、春日詣)

(宇、たゞこそ)

(狭衣、二)

未然形に

(ム)みてけりとだにしられむと思ひてかきつく。

親はらからをかむせられむこそ云々。

それはこゝにこそとてもかくてもいはれめ。

(マシ)すこしもやおもひなぐさまれまし。

かすならば身にしられまし世のうさを。

この世の末にや御覽じなほされまし。

(ズ)うつゝにはふせどねられず。

湯水ものまれず同じ心になげかしかりけり。

腰なん動かれぬ。

打つけていもねられねば。

(蜻蛉、一)

(宇、藏開、下)

(和泉記)

(狭衣、三)

(源、夕霧)

(源、竹河)

(後戀、五)

(竹、取)

(竹、取)

(六帖、六)

(ザリ)かすならぬものにおぼされざらましかば。

(宇、菊の宴)

すべていをこそねられざりけれ。

(六帖、三)

(ジ)かくありきて人にもみえしられじ。

(宇、俊蔭)

はづかしく心づきなき事は御らんせられじとおもふに。

(枕、九)

(デ)それもおもひいてられてなむ。

(宇、藏開、下)

連用形に

(ヌ)俊蔭がふねははし國にはなたれぬ。

(宇、俊蔭)

事しあれば先嘆かれぬ、あなう世の中。

(古、雜、下)

風の音にぞおどろかれぬる。

(古、秋、上)

春きにけりとおどろかれぬる。

(後、春、上)

うらみられぬるものにぞありける。

(大和、語)

おぼしめしとゞめられぬるなん心にとまり侍りぬる。

(竹、取)

(ツ)なにふみかつかうまつられつる。

(宇、藏開、下)

よびかへされつるさきはいかゞいひつる。

(枕、二)

それもこの御かぐらのひるのことにせよとなむ仰せられつる。

(宇、嵯峨院)

ゑかにまゐれと仰せられつれば云々。

(宇、祭の使)

(タリ)國々の受領にあてられたり。

(宇、祭の使)

こなたにも心のどかにゐられたらず、そゝめきありくに。

(源、東屋)

かくせしめられたる事。

(宇、藤原君)

文人もえらばれたる限りまゐる。

(宇、吹上、下)

しやうじにてそこはなはれたれど。

(宇、國讓、上)

(キ)抱きしかば打おとしてさわがれき。

(宇、藏開、上)

人はいさなごしの月ぞたのまれし。

(宇、祭の使)

このさわがれし女のせうと。

(大和、語)

(ケリ)種々關公勞手盡左禮氣利

(宇、菊の宴)

時の上達部に見えしられしかばこそ。

(三代實錄、拾壹、策文)

旅のいはやなき床にもねられけり。

(拾、物名)

同じ時せられける菊合に。

はくえうをして親にもはらからにもにくまれければ。

(ケム)などこの君にしもかくおほされけむ。

發動性間接作用の複語尾に附屬するもの。

原形に

(ベシ)きんつかうまつらすべし。

たづねさすべき方もなし。

みづから参りてなむきこえさすべき。

まわりまうていきこえさすべけれども。

(ベカリ)一日もきこえさすべかりけれども。

(メリ)とにかくにの給ひてきこえさすめりしを。

みだりに人をとこそきこえさすめれ。

(ラム)よそにても見くるしきものにきこえさすらむ。

(ラシ)の例は未見ず。

(古秋、下)

(大和、語)

(宇、あて宮)

(宇、吹上、下)

(大和、語)

(宇、嵯峨院)

(宇、國讓、下)

(宇、藏開、下)

(宇、菊の宴)

(蜻蛉、下)

(和泉、記)

(マジ)人にきかすまじと侍ることを。

人の思ひ侍らむ事の耻しきになむきこえさすまじき。

親ときこゆともいとかくはならはすまじきものなり。

さらにたがへきこえさすまじき由。

未然形に

(ム)捕へさせむと申す。

いかで十五日まちつけさせむと念ずれど。

人の子にこそくはせめといひて。

(マシ)宮わたりにやきこえさせまし。

いかにしなさむと安からずいぶかしがらせましものをとねたれば。

(ズ)云々としてとらせず。

御暇もなかめればえきこえさせずなむ。

いてやをこがましき事もえぞきこえさせぬや。

(源、藤袴)

(源、空蟬)

(源、夕霧)

(源、神)

(竹、取)

(枕、四)

(庵、主)

(和泉、記)

(源、常夏)

(宇、藏開、下)

(宇、俊蔭)

(源、藤袴)

まかてさせねばいみじう怨ずらむかし。

(宇藏開上)

(デ)御覽ぜさせてつとめてもり参りたまひて

(和泉記)

(ジ)とほき所にはさらにすませじ。

(枕十)

(ザリ)などはまゐりこぬとはきこえさせざりし。

(宇國讓下)

連用形

(ヌ)の例は未發見せず。

(ツ)云々ときこえさせつ。

(和泉記)

などかくかたはらいたき事はせさせつる。

(枕四)

あさなあさななききかせつる鳥をころせば。

(和泉記)

晝も御返聞えさせつれば。

(和泉記)

(タリ)大きな例のつるのほどにて白かねをはらふくらに鑄させたり。

(宇國讓上)

うるはしくかきあはせたりし程。

(源帚木)

造麻呂が手にてうませたる子にてもあらず。

(竹取)

云々ときこえさせたれど。

(和泉記)

(キ)いかかはせましとなむ思ほし煩ふとのたまはせし。

(宇祭の使)

一ところなどときこえさせしかば。

(宇祭の使)

(ケリ)そこにこさせけり。

(伊勢語)

さりかけをなむせさせける。

(大和語)

(ケム)の例は未見ず。

統覺を助くるものの相互の承接は一概に論ずべからず。先陳述の確定に関するものは他の不確定に陳述をなすものよりも多く他の複語尾を従はしむ。故に先に之をあぐ。

「つ」に附屬するもの。

原形に

(ベシ)目ごろの罪もゆるしきこえつべし。

(和泉記)

けだものに身をせしつべく。

(宇俊蔭)

まめやかにはみたまひつべき人あらば。

(宇祭の使)

琴なども習はず人あらばいとよくしつべけれど誰かは教へん。(落窪、一)

(ベカリ)哀といひつべからむ事一つ言はんとなん思ふ。(和泉記)

さるさはの池の玉もはみつべかりけり。(大和語)

(メリ)をのこははかなくて失ひつめり。(宇、國讓、上)

大將ひとりみなくひつめり。(宇、國讓、中)

大方の事をこそ宮よりはおぼし置きつめれ。(源、早蕨)

(ラム)身をかへても魂やのこりて侍りつらむ。(宇、春日詣)

鳴きわたる雁の涙やおちつらむ。(古、秋、上)

隨身わらはみうしなひつらむものを。(宇、祭の使)

心えずおぼしめしつらめども。(竹、取)

(ラシ)天つ風こそふきてきつらし。(大和語)

(マジ)の接せる例を知らず。

未然形に

(ム)頼めこし言のは今はかへしてむ。(古、戀、四)

近くてはさりととも御らんじてむ。(和泉記)

今日こそ櫻折らば折りてめ。(古、春、上)

(マシ)わつらはしきことかなとの給はすはさものたまひしらせてまし。

(宇、祭の使)

身は徒になるともとりやかくしてまし。(宇、祭の使)

(ズ)かくながら散らてよをやは過してぬ。(後、春、下)

藤つぼの御方をや今はおろし給ひてぬ。(宇、初秋)

其の他の接する例をしらず。

連用形に。

(ヌ)は附屬することなし。

(タリ)も亦然り。

(キ)はやうみぐしおろしたまひてき。(大和語)

過してし昔はまたもかへりきなまし。(古、春、下)

こうかのこゑにこそなかたゝ多く涙は落してしか。(宇、吹、上)

(ケリ)なほかきあつめてけり。

(保憲女集)

御ぐしおろしたまひてければ。

(大和語)

ケム手すさみに火桶のおきやわりてけむ。

(信明集)

ぬに附屬せるもの。

原形に

(ベシ)まつにけぬべし。

(後雜四)

つはものに身をあたへつべく。

(宇、俊蔭)

斧の柄も朽ちぬべきなめり。

(枕、三)

なたらかなりぬべければ。

(宇、祭の使)

(ベカリ)ほとほとゑみぬべかりしに。

(枕、四)

さしもあらでありぬべかりける人も。

(宇、藏開、下)

(メリ)夜もふけぬめりやとそそのかし給ふ。

(源、真木柱)

身はうきぬめり。

(後雜、四)

時やうやうなりぬめるはいづらおそし。

(宇、樓上、下)

(ラム)片岡の朝の原はもみぢしぬらむ。

(古、秋、下)

いぎたなしとおぼしぬらむこそ物おもはぬさまなれば。

(和泉記)

(ラシ)をとめこそ神さびぬらし。

(源、少女)

(マジ)の例は見ず。

未然形に

(ム)いざ櫻われもちりなむ。

(古、春、下)

わたらせたまひなむや。

(宇、藏開、上)

春毎に花の盛はありなめど。

(古、春、下)

(マシ)過してし昔はまたもかへりきなまし。

(古、春、下)

なほかくてやすぎなまし。

(和泉記)

風をだにまちてぞ花のちりなまし。

(後、春、下)

人しれずたえなましかば。

(古、戀、五)

(ズ)は(ヌ)のみの例を見る。

道しらてやみやはしなぬ。

(後、戀、三)

(ザリ)は附屬せず。

(デ)見るめなきわが身をうらとしらねばやかれなてあまの足たゆくくる。

(古戀三)

かひもなき草の枕におく露のなににきえなておちとまるらむ。(後雜四)
うぎよにはゆきかくれなてうつみ火のいきてかひなき世にもあるかな。

(拾雜上)

(ジ)は附屬せる例なし。

連用形に

(ツ)は(テ)の變化のみ附せる例あり。

その野いといみじきほどになりにて侍りき。

(宇吹上上)

わびにてなむ侍りつる。

(宇藏開下)

人みてはた々わらひにてうつくし。

(宇藏開下)

今はきし方行くさきやすく思ひなりにてはべり。

(源若菜上)

(タリ)花すゝきほにいだすべきことにもあらずなりにたり。

(古序)

まして今は心ぐるしきほだしもなく思ひはなれにたらむをや。

(源若菜上)

ありさまかはりにたる御あたりなりけり。

(源花散里)

十二月十八日の月のよきほどになりたる程におはしましたり。

(和泉記)

春宮もおとなびさせ給ひにたれば。

(源若菜下)

そのけはひはげにまさりたまひにたれど。

(源若菜下)

(キ)雨のいたくふりしかばえまゐらずなりにき。

(大和語)

玉ぼこの道の空にてきえにせば。

(赤染集)

などか一日の御かへりはのたまはずなりにし。

(宇祭の使)

めらめらとやけにししかばかくや姫あひたまはず。

(竹取)

(テリ)逃げらせにけり。

(竹取)

人しくまねばみくさおひにけり。

(古大歌所)

雪ふれば木毎に花ぞさきにける。

(古冬)

よをやへにける。

(後、秋、上)

打よする浪の花こそさきにけれ。

後、賀

人の心かはりにければ。

(後、戀、二)

(ケム)しりにけむ。

(古、雜、下)

行くへもしらぬ大海の原にこそおはしましにけめ。

(源、蜻蛉)

不確定の陳述をなす複語尾にして、未然連用の二變化又はそのうちの一を有するは打消の「ず」設想の「べし」「めり」「まじ」の四にすぎず。しかして「べし」「まじ」は形容詞に同じく下に複語尾を伴ふことなし。又「ず」はこの期に至りては複語尾を伴ふことなし。たゞ「めり」のみは二三の複語尾を伴ふ。而「めり」は未然形を有せず、連用形の例のみを見る。これに附することをうるは「つ」「き」の二複語尾なりとす。

(ツ)いとめやすくもてなし給ふめりつるかな。

(源、寄生)

まじなひたまふめりつるを。

(源、桐、壺)

されどわれよりさきにとこそ思ひて侍るめりつれ。

(枕、十)

(キ)それもくるしげにもしたまふ時もあめりき。

(宇、吹、上)

尼君その程までなからへたまはなんと給ふめりき。

(源、若菜、上)

一日なむおぼんはらへやがて夏の御神樂せさせ給ふめりし。

(宇、祭の使)

それこそ昔の人々などにもあまたの手ひきまさりてつかうまつるめりしか。

(宇、初秋)

いとびんなかめりしかばえ物せず。

(蜻蛉、中)

人の語りたまふめりしかど。

(小大君集)

さてこゝに一の疑問あり。そは濱松中納言物語に

さおもむけ思へる人いと多からむめり。

まだ夜深からむめるをかうてみるみるはえいづまじ。

とあり。こは確に豫想の「む」の原形を「めり」のうけたるものにてしかも、二つもあれば誤脱にあらぬは論なし。余が疑問といふは、この期の他のものにはたえてこの事みえずしてこの書にのみかくあるは、或はこの書の著者の特有語法なるか、若くは、この書は当期のものにあらずしてこの期以後に属するものにあらざるかといふことなり。既に多少の疑を狭める人も見ゆる様なれば、次期以後の研究に俟た

むとす。

以上は複語尾の二個連続せるものをあげたるが、更に進みて三個以上の連続の
状態を研究せむ。

先屬性の複語尾は下に二個連続の複語尾を伴ふことあり。

状態性の複語尾に、

(ナム)すてられなむましに。

(宇、藏開、下)

(ナマシ)又こともなく我は害せられなまし。

(竹 取)

(ニタリ)のふたかはわびしういはれにたりといふめるは。

(枕、八)

(ニキ)いまでもあはれにてまかてられにしをなむ。

(宇、藏開、上)

にくしとおもひたりしこわざまにていひいてたりしこそをかしかりしにそ

へておどろかれにしか。

(枕、七)

(ニケリ)國のかみにからめられにけり。

(伊勢、語)

人ごとにとまれにける世にこそありけれ。

(大和、語)

(ヌベシ)わびしさのちくさのかずもわすられぬべし。

(竹 取)

いとあろかにこそはおぼされぬべけれ。

(和泉、記)

(ヌベカリ)又人の知らざらむことの心にしるくいてられぬべからむをいへ。

(源、若菜、下)

(ヌラム)さりとも今は知られぬらむ。

(源、手習)

(メリキ)こと人をこそものせらるめりしか。

(宇、初秋)

(ツラム)いかにぞおほかりつる心地せられつらむ。

(宇、菊の宴)

發動性の複語尾に、

(テム)さりとしてきこえさせてむとたのみてなむ。

(宇、國讓、上)

(テマシ)さものたまひしらせてまし。

(宇、祭の使)

たばかりきこえさせてましものを。

(源、浮舟)

(テキ)いかてよそながらもの一ときこえさせてしがな。

(宇、祭の使)

(テケリ)この君になほこれのたまへとうらみられてよきなかなればきかせてけり。

(枕、八)

あいなき事についてをもきこえさせてけるかな。

(堤中語)

(ツベシ)さればこそきかせつべしとはきこえしか。

(宇藏開上)

(ツラム)物うくおしはかりきこえさせつらむあさましさよ。

(源東屋)

(メリキ)時々きこえさすめりしを。

(宇菊の宴)

統覺の複語尾にて三個連續するものはぬめりきの一例を見る。

一人はいたづらになりぬめりき。

(宇國讓中)

「つめりき」といふ形も存在すべく想はるれど實例に接せず。

すべて複語尾の四個以上の連續せる例を見ず。

「ざり」たり「けり」べかり「まじかり」は形式用言ありの熟語なるが故にこの複語尾の上と下とは純粹複語尾相互の承接の例とすべからず。この故にこれらの下には相當の複語尾あるべく、又上にも相當の複語尾あるべし。上なるものは既に述べし所なり。下なるは次にのべむ。

「ざり」に附屬するもの。

原形

(ベシ)離れそむききこえさせむもけしからざるべし。

(濱松語)

いかゞつらしとおもはざるべし。

(古物名)

いとまばゆききははせざるべし。

(源句宮)

(メリ)は中間に音の省略あり。後に述べむ。

(ラム)藤つぼのもの字にもおとらざるらむ。

(宇藏開上)

などか思ひにかわかざるらむ。

(後戀五)

(ラシ)しほみつらみはこほらざるらし。

(重之集)

(マジ)は附屬せず。

未然形に

(ム)植ゑしうゑば秋なき時やさかざらむ。

(古秋下)

香をとめて誰をらざらむ梅の花。

(拾春)

かれゆく君にあはざらめやは。

(古戀四)

まるこにこそそのたまはざらめ。

(宇祭の使)

(マシ)しのびに袖はしぼらさらまじ。

(古戀二)

ゆめとしりせばさめざらましを。

(古戀二)

まさよりこそはまじらはさらましか。

(宇、祭の使)

打消の複語尾は接せず。

連用形に

(ヌ)は今昔物語に例を見れど、この期のに未発見せず。

(ツ)悲しさのなくさむべくもあらざりつ。

(後、哀傷)

などかすゞみにはいてたまはざりつる。

(宇、祭の使)

けふのふみにきこえざりつる句を一人ずする人あなり。たれぞ。

(宇、祭の使)

(タリ)は接せず。

(キ)山里のまきの板戸もさゝざりき。

(後、戀、一)

あかざりし袖の中にやいりにけむ。

(古、雜、下)

いつかは君かよかれせざりし

(後、戀、五)

いと心まとふばかりは思ひ入れざりしかど。

(源、竹川)

(ケリ)まだねざりける人かな。

(和泉、記)

おもへどえこそたのまざりけれ。

(古、戀、四)

ならび給ふべくもあらざりければ。

(源、桐壺)

めもはるにのなる草木ぞわかれざりける。

(伊勢、語)

(テム)あしたづのなかか齡をゆづらざりけむ。

(拾、雜、上)

はかなくてたえにける中なほやわすれざりけむ。

(伊勢、語)

「たり」に附屬するもの

原形に

(ベシ)さなりたるべしとよにもいひさわぐ心つきなさになりけり。(蜻蛉中)

(メリ)は中間に音の省略あり。後に述べむ。

(ラム)普だに人まどはしたまひし御こといかになりたるらむ。(宇沖つ白波)

(ラシ)の例を見ず。

(マジ)いきたるまじき心ちするは。

(蜻蛉、上)

未然形に

(ム)さるもんど文などをさへ尋ねいてたらむ。

(宇藏、開、上)

此をりにきしつけたらむはいかゞおぼゆるむ。
まろをこそをかしと思ひたらめ。

(マシ)呼びてやおきたらまし。

昨日山べをみたらましかば。

(ズ)かきあつむるも定めたらず。

何事かあらんともおもほしたらず。

それをば何ともおぼしたらぬぞあさましきや。

(ジ)デの例は見ず。

連用形に

(ツ)したり顔におぼしたりつるもいとにくし。

とみなる召使のきあひたりつればなむ。

(ヌ)の例は知らず。

(キ)後やすきものにおぼしたりきかし。

山寺にまかりたりしを。

(枕 三)

(宇、國讓、上)

(和泉記)

(和泉記)

(保憲女集)

(源、桐壺)

(源若紫)

(和泉記)

(蜻蛉、一)

(源、權)

(元輔集)

一夜おはしましたりしかど。

(ケリ)うまれたりけり。

わかさのごといふ人をめしたりけるが。

年比えあはざりつるなどいひ遣したりければ。

(ケム)かへしはいかゞしたりけむしらず。

連體形には「らし」の附屬するのみ。但中間に音の省略あり。後に述べむ。

「べかり」に附屬するもの。

原形に

(メリ)は中間に音の省略あり。後にのべむ。

(ラム)いくしほとかはしるべかるらむ。

(ラシ)は例を見ず。

未然形に

(ム)かやうなるやこれにかなふべからむ。

いかゞはすべからむ。

(蜻蛉、下)

(古、序)

(枕 四)

こは又「べけむ」といへる例あり。

まことやきこえむとしつることはあす御くるまたまふべけむ。

(宇、國讓、下)

(マシ)の例は發見せず。

(ズ)のこりの命一二日をも惜まざばあるべからず。

(源、手習)

天とひとしき水たへてひたすともひとすぢなかるべからず。

(宇、吹上、上)

連用形には「キ」「ケリ」のみ接す。

(キ)やがて一日にきうかべたまふべかりき。

(宇、樓上、上)

昔はさてもはべりぬべかりし。

(宇、國讓、中)

あるべかりし人の御事かは。

(狭衣、四)

(ケリ)里をばかれずとふべかりけり。

(古、雜、下)

音にぞ人をさくべかりける。

(古、戀、四)

夢とこそいふべかりけれ。

(古、哀傷)

「まじかり」に附屬せるもの。次の數例を見るのみ。

未然形に

(ム)みかどにて子をもたらむもめてたくもあるまじからむ。

(宇、樓上、上)

連用形に

(キ)まゐるまじかりしをせちにのたまひしかば。

(宇、俊蔭)

(ケリ)かくてはえあるまじかりけり。

(宇、國讓、上)

人の胸あくまじかりける人の云々。

(源、桐壺)

御まへわたりのおぼつかなさになほえかくてはあるまじかりける。

(枕、七)

つひに獨は過したまふまじかりければ。

(大和、語)

以上は一個附屬の例なり。二個以上の例は見ず。

五 用言の本幹と複語尾との承接

複語尾を有しうる用言は動詞形式動詞純粹形式用言の三類なることは前期に異ならず。而、屬性の運用を助くる複語尾と非現實性の陳述をなす複語尾とは未然形に接し、陳述の確定をあらはすものと回想をあらはすものとは連用形に接し、設想をあらはすものは動詞形式動詞の原形純粹形式用言の連體形に接すること亦前期に同じ。かくてそれらは上來掲げし數多の例によりて知らるゝが故に再之を掲げず。たゞ、特に注意すべき事を次に述べむとす。

純粹形式用言の各種は必しも一樣に複語尾を伴ふものにあらず。

第一種の「あり」即存在動詞にはすべての複語尾接すと想はる。

(ル)は例を知らず。

(ス)されどめぐりにあきて中夜火をあらせたるはよし。

(枕、十一)

五せちのつぼねを日もくれぬ程みなこぼちすかしていとあやしくてあらす。

(枕、五)

(ニ)入めもる我かはあやな花薄などかほに出て戀ひずしもあらむ。

(古、戀、一)

こひこひて後もあはむとなくさむる心しなくは命あらめや。

(拾、戀、三)

(マシ)かたみこそいまはあたなれこれなくばわするゝこともあらましものを。

(古、戀、四)

あらましかばとあはれにくちをししく覺しいづ。

(源、玉、葛)

(ズ)古にありきあらずはしらねども。

(古、賀)

(ジ)われよりはまたあらじとおもはむ。

(六、帖、六)

かゝる折はあらじと云々。

(和、泉、記)

(ザリ)今あらざりけりとてこよなくかはらんもうたてあれば。

(源、藤、袴)

思ふ事しらはかひやあらざらむ。

(蜻、蛉、上)

(ツ)草木ばかりぞありつる。

(宇、藏、開、下)

おやのものせられつるときこそさてもありつれ。

(宇、國、讓、上)

(ヌ)かゝる事なほありぬ。

(土、佐)

(キ)古にありきあらずはしらねども。

(古、賀)

古のしつのをたまきいやしきもよきも盛りはありしものなり。(古、雜、上)

(ケリ)何せむに命をかけてちかひけむいかばやとおもふをりもありけり。

さかの山みゆきたえにし芹川の千世のふる道あとはありけり。(後雜、一)
秋をおきて時こそありけれ。(古、秋、下)

(ケム)

(ベシ)御即位廿三日あるべしとのしる。(宇、國讓、下)

娘どもあるべきさまに見おきて下りなんとす。(源、蓬生)

右近にあるべき事のたまはせて渡り給ひぬ。(源、玉葛)

(ベカリ)いかゞあるべかりける。(蜻蛉、下)

(メリ)

(ラム)君にくらべむ心やあるらむ。(貫之集)

(ラシ)ぬきみだる人こそあるらし。(古、雜、上)

(マジ)一日に一たびみではえあるまじとて。(枕、十)

さらにあるまじき事とおぼす。(源、滯標)

第二種の「かり」なり即ち形容動詞には屬性を助くる複語尾接せず。

「かり」の例

(ム)かれをさしるひおさはいとあしからむ。(宇、國讓、下)

あなじくは人にまさらむこそよからめ。(宇、吹上、上)

(マシ)いかによからまし。(宇、藏開、中)

いかに心うくつらからまし。(枕、七)

(ズ)宮もいふかひなからずつれつれのなぐさみには思さる、ほどに。

淺からぬ心のほどを。(和泉記)

(ジ)情なからじとばかりにこそとみれば。(和泉記)

(ツ)さる事もなかりつとてなきたまふさま。(和泉記)

けさはうかりつる鳥のねにちとろかばれて。(源、夕顔)

今宵の雨の音はいとどろどろしかりつるなどまめやかにのたまはせたるを。(和泉記)

(ヌ)いまはしにくかりぬべきこと。(宇、國讓、下)

こゝには弓ばなくてあしかりぬべしとて。
しはしはありきかたかりなむかし。

(キ)いと美しかりき。

宮と中の君とは御かみはありがたかりし。

思ふことこそ身になかりしか。

(ケリ)よふかからては月ながりけり。

なほあやしかりける身かな。

たゞほりにほりていぬるこそわびしうねたかりけれ。

(ゲム)いかにくかりけむなどわらふ。

(ベシ)たちわかれなばこひしかるべし。

すさまじかるべき事かは。

(メリ)

(ラム)いとみぐるしかるらむ。

(ラシ)

(蜻蛉上)

(蜻蛉上)

(宇藏開下)

(宇藏開下)

(後戀一)

(古俳諧)

(和泉記)

(枕五)

(枕七)

(古離別)

(枕五)

(宇國讓上)

(マジ)なかもよろしかるまじきが。

「なり」の例

(ム)いかてかみすの前をばわたり侍らむいときやうきやうならむ。

(源横笛)

少納言よ香爐峯の雪はいかならむと仰せられければ。

(枕十一)

(マシ)いとかゝらておいらかならましかば。

(源東屋)

此方のたをやかならましかばと見ゆかし。

(源帚木)

(ズ)やしなひ奉る志おろかならず。

(竹取)

この人の御あはれいとまさり心くるしさもなのめならず。

(濱松四)

ありありてかくよのきゝみもなのめならぬ事のいてきぬるよ。

(源若菜上)

すくよかならぬ山のけしきこぶかく。

(源帚木)

かくなのめならぬありさまを。

(狭衣四)

あはれなりつる夜のけしきも。

あはれなりつる夜のけしきも。

あはれなりつる夜のけしきも。

あはれなりつる夜のけしきも。

あはれなりつる夜のけしきも。

あはれなりつる夜のけしきも。

あはれなりつる夜のけしきも。

あはれなりつる夜のけしきも。

あはれなりつる夜のけしきも。

あはれなりつる夜のけしきも。

あはれなりつる夜のけしきも。

あはれなりつる夜のけしきも。

あはれなりつる夜のけしきも。

あはれなりつる夜のけしきも。

(和泉記)

(土佐)

(源若菜上)

(狭衣二)

(枕五)

(蜻蛉上)

(源竹川)

(源夕顔)

(源横柱)

いとこそあはれなりつれ。

(宇藏開上)

(タリ)

(キ)彼は人もゆるしきこえざりしに御心ざしあやにくなりしぞかし。

(源桐壺)

はかなき一くだりのたまさかなりしもたえはてにたり。

(源若紫)

昔あてなりしをとこなりけり。

(伊勢語)

(ケリ)歌にあやしうたへなりけり。

(古序)

何のかずならぬしもべどもなどに此院に参るには心づかひことなりけり。

(源初音)

むかし男はつかかりける女のもとに。

(伊勢語)

君のみこゝろはあはれなりけるものを。

(源帚木)

(ケム)いかなりけむたがひめにて。

(濱松三)

(ベシ)これをたゞにたてまらばすゝろなるべしとて。

(伊勢語)

一夜もへだてじとおもふなめりとあはれなるべし。

(枕十一)

いたづらなるべくなむ。

(宇、國護、上)

いかなるべき御ありさまどもにかあらむ。

(源、明石)

ゆかしう思ひきこえたまへど今夜はいとゆくりかなるべければ。

(源、御幸)

(ベカリ)

(メリ)

(ラム)けふはよどのやあらはなるらむ。

(師、氏集)

(マシ)

(マシ)げにみやづかへのすぢにてけさやかなるまじくまぎれたるおぼえを。

(源、藤袴)

第三種の動作存在動詞も第二種のと同じ。

(ム)いくたびにかはきゝさだめ給へらむ。

(宇、菊の宴)

(マシ)昔誰もたれもおはせし世にこゝにおひいてたまへらましかば今少し哀れはまさりなまし。

(源、東屋)

對の上のかやうにてとまりたまへらましかばいかばかり心をつくしてみえ奉らまし。

(源、匂宮)

(ズ)あきたまへらずなりにしかば。

(宇、藏開、上)

くすの木はこだちおほかる所にもことにまじらひたてらず。

(枕、三)

(デ)

(ジ)わび人は憂世の中にいけらじと思ふ事さへ。

(拾、雜、上)

(ザリ)たちのうちにもおいたまへらざりしかば。

(源、浮舟)

(ヌ)

殿の中にはたてりなむや。

(源、常夏)

(ツ)ぬひとのぢんの方にはかにものまきたる車どもきたにたてりつ。

(宇、藏開、下)

あばらなるいたじきに月のかたふくまでふせりてこそをこひてよめる。

(伊、勢、語)

いといかめしき事多くしたまへりつるかな。

(宇、藏開、上)

ほのかなれどそびやかにふしたまへりつるやうだいのをかしかりつるを。

(源、螢)

(タリ)そとろさむきにうへのあこめたゞ二つたてまつりたまへりたり。

(紫、日記)

(キ)かやうのふねわりごすきばこなどしてこの三人の人になむたまへりし。

(宇、吹上、上)

(ケリ)云々となむのたまへりける。

(宇、あて宮)

北の方の對にわたらせたまへりければ。

(和泉、記)

(ケム)我國の神の守りやそへりけむ。

(蜻蛉、下)

(ベシ)

(ラシ)

(メリ)今はなぐさみたまへるめり。

(宇、藏開、上)

宮などをばむつびあそびたまへるめり。

(宇、樓上、上)

(マジ)少々の人はえたてるまじき殿の内かな。

(源、行幸)

などかみこをだにもたまへるまじき。

(源、落標)

第四種の説明動詞も亦第二種に全じ。但體言をうくるもの、連體形をうくるものに限る。

(古、戀、四)

體言をうくるなり。

(宇、樓上、下)

(ム)こひしとはたかなつけけむ事ならむ。

(古、春、上)

何事ぞや君の御耳に入り給ふは事もなきことならむ。

(源、早蕨)

(マシ)春はすぐともかたみならまし。

(源、玉葛)

からをだに止めて見奉るものならましかば。

(伊勢、語)

(ズ)あが姫君大貳の北の方ならずば云々。

(庵、主)

月やあらぬ春や昔の春ならぬ。

(古、戀、四)

常のすみかならぬ心ちも夜のふけゆくに哀れなり。

(古、春、上)

心し秋のみぢならねば。

(古、春、上)

(チ)君ならて誰にかみせむ梅の花。

(シ)しり顔ならじとて御おくりにもこわつくらず。

(源末摘花)

(ザリ)同じくはみえ奉り給ふ御宿世ならざりけむよと見奉る人は口をしがる。

(源早蕨)

我ならざらむ人はみざめしぬべき御有様を。

(源初音)

(ヌ)

(ツ)さてたえなんとは思はぬけしきなりつるを。

(源花宴)

(タリ)

(キ)古の事をも歌の心をも知れる人僅に一人二人なりき。

(古序)

わらはなりし人ぞおとなになりて。

(宇國讓上)

(ケリ)若宮はおどろきたまへりや時のまもこひしきわざなりけり。

(源若菜上)

ともだちなりける人の。

(伊勢語)

たのめしことぞ命なりける。

(古戀二)

西こそ秋のはじめなりけれ。

(古秋下)

(ケム)あなしれやおなじ心なりけむ人を。

(宇、壁紙院)

(ベシ)めのとるべし。

(宇、樓上下)

思ふよちたがへる事なんあやしく心と交るわざなるべき。

(源、帚木)

かくてのみ事といへばひた面なるべければ。

(源、夕霧)

(メリ)

(ラム)たがたのめなるこよひなるらむ。

(拾離戀)

(ラシ)長月の有明の月の桂なるらし。

(後秋下)

(マシ)

用言の連體形をうくるなり。

(ム)いかにするならむとふるはれ給へど。

(源、若紫)

何人を又尋出給へるならむ。

(源、玉葛)

(マシ)

(ズ)いまはせかれたまふべきならねば。

(源、夕霧)

(デ)いつまでとかやふすぶるならても云々。

(源、篝火)

(ジ)この人々は皆思ふ心なきならじ。

(源常夏)

(ザリ)

(ツ)男とかいふなりつ。

(宇國讓上)

明日は物忌といふなりつるになくば怪びなんとて。

(和泉記)

いづこより入來つると問ふなりつるは云々。

(紫日記)

(タリ)

(キ)

いとひだうなる事とこそ給ふなりしか。

(落窪二)

いとあはつけいやうに世人はもどくなりしかど。

(源竹川)

(ケリ)秋はつる色のかぎりをみするなりけり。

(後秋下)

猶やすき故里にはすみよくしたまふなりけり。

(源匂宮)

猶よしの文かよはしのみにはあらぬなりけり。

(源蜻蛉)

(ケム)ことそくなりけむかし。

(源蜻蛉)

(ベシ)雨いたう降りたるに誰もふりこめられたるなるべし。

(蜻蛉上)

女御とのとうたがひなく思ふなるべし。

(紫日記)

いままうのぼりける道にふたげられてとこほりゐたるなるべし。

(源蜻蛉)

(タリ)

(ラム)秋はつる色のかぎりをみするなるらむ。

(後秋下)

(ラシ)

(マシ)

さて「べし」「めり」「らし」の三は上なる用言が連體形に於いて「る」音を有する時はその「る」を省きてその幹音より直に接するをこの期の特徴とす。この特徴は主として純粹形式用言にあらはれ又その形を有する複語尾にあらはる。又稀にありに基づける動詞「いますかり」「はべり」にあらはるゝことあり。

動詞にあらはるゝ例

(ベシ)の例は見ず。

(メリ)かくはかなくていますか(ル)めるを。

たゞいまの琵琶の一つはらう少將こそは(ベ)ル(め)れ。

いたうわびは(ベ)ル(め)りとあり。

もろこしには春の花の錦にしく物なしといひは(ベ)ル(め)り。

ほのかにの給ふさまもは(ベ)ル(め)り。

かうさわがしけには(ベ)ル(め)るを。

いとあやしきぼんじとかいふやうなるあとには(ベ)ル(め)れど。

(大和語)

(宇、初秋)

(和泉記)

(源、薄雲)

(源、推本)

(源、野分)

(源、若菜、上)

(蜻蛉、下)

(ラシ)の例は見ず。

純粹形式用言にあらはるゝ例。

(ベシ)からうこそあ(ル)べ(け)れ。

はしたなくもあ(ル)べ(い)かな。

一つ二つのふしは過すべくあ(ル)べ(か)りける。

(源、空蟬)

(源、朝顔)

(源、帚木)

あてなる人は皆もの清げにけはひ殊な(ル)べ(い)物とのみおとゝ中將などの御
勻に目なれ給へるを。

おもへばうらめしか(ル)べ(い)事ぞかし。

(源、行幸)

あ(ル)べ(き)宵など。

(源、末摘花)

おもうたまへいでむにも(し)か(ル)べ(け)れば。

(蜻蛉、中)

おほよその人のなだてな(ル)べ(け)れば。

(保憲女集)

いかな(ル)べ(い)事ぞとも。

(源、行幸)

皆物きよげにけはひことな(ル)べ(い)ものとのみ。

(源、行幸)

(メリ)口々しほたれあへることどもあ(ル)め(り)。

(源、明石)

今はいとまあ(ル)め(る)を。

(宇、俊陰)

大將のみてにこそあ(ル)め(れ)わか君にとて手本あ(ル)め(り)しおなじ手な(ル)め(り)。

(宇、國讓、中)

(宇、菊の宴)

のたまはするにこそはあ(ル)め(れ)。
このころはこととはな(ル)め(り)。

(枕、四)

とう侍徒は御いとまぞなか(ル)める。

(宇、吹上、上)

はるののこりはまだおほか(ル)めるものを。

(宇、菊の宴)

人もなきな(ル)めりとおもひて。

(宇、俊蔭)

げにさな(ル)めり。

(宇、國讓、中)

神もすみたまふな(ル)めりとおもひて。

(庵、主)

さるはいと口惜しからぬものにこそあ(ル)めれ。

(和泉、記)

(ラシ)雁なきて寒き朝の露な(ル)らし。

(後、秋、下)

秋の夜は露こそことにさむか(ル)らし。

(古、秋、上)

流れくるたきのいとこそよわか(ル)らし。

(拾、雜、上)

こひしねとするわざな(ル)らし。

(古、戀、一)

複語尾は「ざりたり」べかり「まじかり」に對して「めりに」けりに對して「らし」にこの

現象あり。「べし」にはなし。

「ざり」に對して
あらざ(ル)めり。

(竹、取)

そもまた思ひさだめられざ(ル)めり。

(宇、菊の宴)

ことになしとも思ひたらざ(ル)めるをや。

(宇、國讓、上)

さるべきにも侍らざ(ル)めれば。

(宇、菊の宴)

「だり」に對して

さしぬきなどふみちらしてゐた(ル)めり。

(枕、二)

すこしはまうてきた(ル)めり。

(宇、初秋)

こともなく心づかひしてなむ詣てきた(ル)める。

(宇、初秋)

「べかり」に對して

人々のぞくべか(ル)めり。

(源、帚木)

さすらへたまふもあべか(ル)めり。

(源、朝顔)

なさけなさけしくのたまひつくすべか(ル)めれど。

(源、帚木)

「まじかり」に對して

たゞいまのことわがくらゐはえあるまじか(ル)めり。

(宇、國讓、上)

さしも思ひよるまじか(ル)めり。

(源、橋姫)

「げりに對して

ひとりのみもあらざりけ(ル)らし。

(伊勢語)

今朝ぞ初霜おきにけ(ル)らしな。

(能宣集)

しのびて心かはせる人もありけ(ル)らし。

(源、帚木)

かくて又かゝる類似の現象は純粹形式用言の第四種の「なり」の上にある用言に於いてもあらはる。

「あり」

あ(ル)なり。

(竹 取)

それにぞあ(ル)なるとはきけど。

(伊勢語)

あはれ旅人にこそあ(ル)なれ。

(宇、俊蔭)

「かり」

均しか(ル)なり。

(竹 取)

山本ちかか(ル)なり。

(竹 取)

少納言云申文无加(ル)奈利。

(西宮記、十八、无申文儀)

いとうれしか(ル)なり。

(宇、國讓、上)

「なり」

さらばそのゆるごんな(ル)なりな。

(源若菜、上)

いとうれしき事な(ル)なり。

(宇、吹上、上)

「ゆり」

くま狼ならぬはすまぎ(ル)なり。

(宇、俊蔭)

あはぎ(ル)なるかぐや姫はいかばかりの女ぞ。

(竹 取)

「たり」

あやしくてかくれにしわらはまうてきた(ル)なり。

(宇、藤原君)

致仕のおとこの御ぞうの笛のねにこそ似た(ル)なれ。

(源、橋姫)

あさましき事どもをきこしめした(ル)なれば。

(和泉、記)

「へかり」

御あそびあるべか(ル)なるに

(宇、吹上、上)

宮へわたらせたまふべか(ル)なるを。

(源若紫)

それらもかゝるついでにこそうけたまはりぬべか(ル)なれ。(宇、菊の宴
まじかり)

きんぞえつかうまつりあはすまじか(ル)なる。(宇、國讓、中)

よせ給ふまじか(ル)なればいかゞすべからむ。(蜻蛉、下)

複語尾の連用形は用言に接続しうるものなるが、この現象はすべての複語尾に
存するものにあらず。そのこれあるは屬性を助くる複語尾と陳述確定の「つ」と設
想の「べし」「まじ」となり。

状態性間接作用

浦島子加天女釣良禮來豆

(續後紀、十九、長歌)

かたの、少將にわらはれたまひけむかし。(源、帚木)

是はことにぢんのけそくのつくゑにすゑて佛のおほんおなじ帳臺の上にか
ざられたまへり。(源、鈴蟲)

腹だゝれたまへば。(落窪、一)

春宮はらまれはじめたまひしより。(宇、國讓、中)

月日のふるまゝにあふごなきねのみなかれまさりて。(宇、俊蔭)

發動性間接作用

かゝせさせたまふ。(枕、八)

内ずみせさせ奉りて。(源、落窪)

思ひきこえさせ侍りし。(源、松風)

目の前の涙にくれてえきこえさせやらず。(源、蜻蛉)

いかておもふやうなる人にぬすませ奉らむ。(落窪、一)

いとわづらはしうきこえさせにくゝなむ。(源、夕霧)

「つは」にてにのみあらはる。(源、若菜、上)

今はきし方ゆくさきうしろやすくおもひなりにて侍り。(和泉、記)

少しよろしうなりにて侍れば。(宇、吹上、上)

その野いといみじきほどになりにて侍りき。(源、柏木)

行ひがちになりにて侍れば。(源、柏木)

べし

對面すべくたばかれ。

(源、空蟬)

此御勻にはならびたまふべくもあらざりければ。

(源、桐壺)

ことならば君とまるべくにほはなむ。

(古、別)

涙のみしるみのうさもかたるべくなげぐ心を枕ともかな。

(後、雜、四)

おほやけにつかうまつりぬべく見えつるものを。

(宇、あて宮)

車よりおちぬべうまどひ給へば。

(源、桐壺)

楊貴妃のためしも引きいてつべうなりゆくに。

(源、桐壺)

「まじ」

えしもたへ給ふまじくおもほゆればなり。

(宇、たゞこそ)

えみすぐすまじくおもほえつるを。

(宇、祭の使)

げにえたふまじくないたまふ。

(源、桐壺)

そのものともみゆまじうしたてたるやうだいの。

(源、少女)

複語尾を「あり」にてうけたる「ざり」「たり」「べかり」の類にはこの用法なし。

回想の「き」「し」「しか」が用言の本幹に附屬するときは前期と同じく一種の特例あり。

り。

三段形の「く」なる動詞に對して「き」は附屬せる例をみず。「し」「しか」は未然形にも連用形にも接する例あり。

未然形に

時雨と共にふりててぞこし。

(後、冬)

よるをひるになしてなむいそぎまかてこし。

(宇、吹上、上)

からうじてなむよべまうのぼりこし。

(宇、吹上、上)

こしときはひさにふしたまへりし人を。

(蜻蛉、上)

入ふるす里をいとひてこしかども。

(古、雜下)

又かのにくかりし故こそいかめしきこともいてこしか。

(源、須磨)

面かげに身をもはなれず山ざくら心のかぎりとめてこしかど。

(源、若紫)

連用形に

きし方ゆくさきあるまじき事をせさせむ。

(宇、吹上、下)

きりはきし方みえずたちわたりて。

(蜻蛉、上)

なめげなる心の程はきし方ゆく末こよなくおほゆるを
まざるゝ方なくてきし方の事を。

(狭衣、四)

きし方もすぎたまひけむわたりなれど。

(源、櫛)

形式動詞に對しては、きは連用形に「し」しかは未然形に接するを以て常規とす。

(源、夕顔)

(き)鬼のやうなるもの出来て殺さむとしき。

(竹、取)

秋風のふくには萩の音づれもしき。

(和泉、記)

(し)我ぞよるべもなきこゝちせし。

(後、戀、二)

さていかゞごらんぜし。

(宇、藏開、下)

(しか)やがてさぶらはむとせしかど。

(宇、藏開、中)

せぬわざわざしつべき心ちこそせしか。

(宇、沖つ白波)

六 用言の用法

用言の用法の根柢たるものは終止の用法なり。終止は之を叙述の終止と許容

終止とに分ちて説く。叙述の終止は尋常の終止と曲調とあり。尋常の終止は原形を以てす。以下その實例のすてにあげたるものはこゝにあげず。

曲調は連體形を以てすると已然形を以てするとあり。第一曲調たる連體形を以てするものは通例、ぞ「なむ」や「か」の助詞の勢力の然らしむるものなれど、必しもこれらの助詞なくとも終止をなすことあり。その例

かゝるものゝよういあるときはかにすればわづらはしき。(宇、藏開、下)
たとしへなくよろつわするゝにもかつはあやしき。(紫、日記)

あやしきものかな御ぜんにかゝる物をさしいれていぬるとて見れば。

(宇、國讓、中)

いてさせ給はむにかのみたうの谷たづねさせ給へとていぬる。(狭衣、二)
とみなる事にてとゞめ侍らぬ。(落窪、一)

あのがうみたらむ子どもだにかくあるかにて仕うまつらぬ。(落窪、三)

くちをしくこのをさなきものはこはくはべる者にてたいめんすまじきと申す。(竹、取)

又、こそ助詞に對して第一曲調を起すことあり。但、こは純粹形式用言と回想の複語尾「き」とにあらはるゝのみなり。

あやしう心にくくらうある人なればこそ、さみつゝある。
(字、初秋)

こむといひてござりしよるもありしかばまたぬしもこそ、まつにまされる。
(六帖)

それこそみぢみるとありし。
(字、國讓、中)

こだかき蔭と仰がれむ物とこそ、そみし。
(古、長歌)

時雨と共にふりてこそ、こし。
(後、冬)

第二曲調は、こそに對して已然形を以てするものなるが、この終止を有せぬものあり。形式形容詞「ごとし」と純粹形式用言の第三種即動作存在動詞の良行なるとなり。このうち「ごとし」は絶對的に「こそ」に對しての終止の形を有せず。

許容終止は形容詞、及其の形を有せる形式用言、複語尾には存せず。動詞及形式動詞は之を有す。純粹形式用言は有すると有せぬとあり。動詞は、四段形にては已然形を以てこの用に供し、その他は未然形を以て之にあ

つ。奈行變格は特にこの形を別に具せり。又四段形、三段形はその變化其のまゝにて終止の用をなすれど、他は必助詞「よ」の助けをかりてその意を全くすることゝなれり。但、四段形、三段形に「よ」を添ふるも勿論例あり。

四段形

文きけとのたまへば。
(字、藏開、下)

かくれたらむ所にだになほゐていけ。
(源、帚木)

落くほの君ゐておはせ。
(落窪、一)

たゞいふにしたがひてよめ。
(字、藏開、中)

御いのりもつかうまつれ。
(字、吹上、下)

いて遊ばさむや御琴まゐれ。
(源、紅梅)

いまだになのりしたまへ。
(源、夕顔)

ありとあるかぎりみこにもおはせよ。上らうにもあれ、おもてやは見たまへる。

(字、國讓、中)

ふみはよもみたまはじ、詞にて申せよ。
(大和、語)

せうとをみてのみはやまじと大納言に申せよ。

(源、紅梅)
(宇、祭の使)

物なんとたまへよ。

(源、空蟬)

あひおもひたまへよ。

(落窪、三)

さらば年のうちにしたまへよ。

(和泉、記)

そのおはする所にすゑたまへよ。

(狭衣、一)

よしみたまへよ。

(古、春、下)

藤の花はひまつはれよ。枝はをるとも。

(宇、菊の宴)

奈行變格は「ね」といふ形を以てす。

たゞ今いそぎみるべきにあらねばいね。

(枕、四)

笑ひにくみていねいねといふもをかし。

(枕、四)

こひしねとするわざならし。ぬばたまの夜はすがらにゆめにみえつゝ。

(古、戀、一)

三段形

夜さりこのつかさにまうて。ことのたまひて。

(竹、取)

とくこといひやりたるに。

(枕、二)

かれはなにのけふりぞみてことおほせられければ。

(枕、八)

とくめぐりこよ。空のうきぐも。

(兼輔集)

上二段形

ゆかしからぬ事ぞはやくすぎよ。

(枕、五)

天つ風雲の通路ふきとぢよ。

(古、雜上)

さらばしひよや。

(宇、藏開、中)

宮人のまとゐするまでいよ。ひめ松。

(宇、藏開、中)

雪ふみわけてありよとぞおもふ。

(貫之集)

下二段形

人にはつげよ。あまのつり舟。

(古、旅)

みくるまかけよ。かけよとのしれば。

(蜻蛉、上)

つくりかさねよ。千代のなみくら。

(拾、神樂)

我に教へよ。行きてうらみむ。

(古春下)

おのが命をば松にあえよとてひきのべ。

(保憲女集)

あかずわかるゝ君をとゝめよ。

(古離別)

この二段形のは通例は上の如く、よを添ふるものとすれど、又よなくして許容をなすことあり。

ふじのねのならぬおもひにもえばもえ。

(古俳諧)

ゑこひする君がはしたかしたがれののになはなちそはやく手にする。

(順集)

上一段形

わかやかなる女郎花色のしたがさねきよとのたまふ。

(宇樓上下)

よしみむ人は枝ながらみよ。

(古秋上)

いてゝみよ、れいならずいふは誰ぞ。

(枕七)

われらをかれがやうにいてゐよとあらば。

(紫日記)

下一段形のは例を見ず。

形式動詞

思い出にせよ。

(古賀)

あざりものせよといひやりつるは。

(源夕顔)

昔の袂よかわきだにせよ。

(古哀傷)

時鳥はねならはしに枝うつりせよ。

(後夏)

純粹形式用言は、已然形を以てし、よを添へても、又そへても許容をなしう。されど、この法を有するは、第一種と第二種と第三種と第四種の「あり」とに限る。第四種の「なり」にはこの用法なし。

第一種のものゝ例。

さてたひらかに世にあれとおもほせとかき給へり。

(宇國讓中)

さりともあごはわが子にてをあれよ。

(源帚木)

とまれかくまれとくやりてむ。

(土佐)

第二種のものゝ例。

あしかれとおもふたまへねばこそ。

(宇國讓中)

身一つの嘆きより外に人をあしかれなどおもふ心もなければど。(源、葵
ひさしかれあだにちるなと櫻花かめにさせれどうつろひにけり。

(後春、下)

いつよりもこよひの月はさやかなれ。

(仲文集)

第三種のものゝ例。

わが君御ふところにいだかせ給へれ。

(宇、藏開、中)

これらとりあかせたまへれ。

(宇、藏開、下)

くたもの一餌袋してあいたまへれ。

(落窪、一)

暫入りてふしたまへれ。

(落窪、一)

事しげししばしはたてれ。

(後雜、一)

第四種の「あり」の例。

ありとあるかぎりみこにもおはせよ上らうにもあれおもてやはみえたまへ
る。
ふるきにもあれあたらしきにもあれ人はさらにみたまはじ。(宇、國讓、中)

(宇、國讓、上)

複語尾にて許容法を有するものは屬性を助くるものと確定をあらはず、「つ」と「つ」
が「あり」に熟合せる「たり」と「ざり」とのみなり。その形によりて用言と同じ變化を以
てす。

状態性間接作用

みこゝろとてめてせられよ。

(宇、吹上、上)

火くらかめり御まかなひせられよ。

(宇、樓上、下)

いてあな心うこれおぼされよ。

(枕、七)

年の内に出くる節會の中にいづれいとせちにらうありさだめ申されよや。

(宇、初秋)

發動性間接作用

めのとたちしてまうさせよ。

(宇、國讓、中)

いとあやしかなりはやもとめさせよ。

(宇、國讓、上)

これ持て参りていかゞみたまふとてたてまつらせよとて。

(和泉、記)

例の車にさうぞくせさせよとて。

(和泉、記)

ことごとしからぬ車さしいださせよ。

(源、寄生)

こは又よを添へぬもあり。

凡帳をたかうなさせとのたまひて。

(宇、樓上、下)

人々ゑはせなど仰せらる。

(枕、六)

う

そのつみしろはよろこびをしてよ。

(宇、沖つ白波)

此つかさの程は念じてとめてよかし。

(枕、三)

君わたりなばがちかくしてよ。

(古、秋上)

一かたにもひさだめてよ。

(源、浮舟)

たり

さらばかのきこえしみづの御ゑはかならずしかおほしたれ。(宇、國讓中)

こなたになすませそとりこめおきたれ。

(落窪、一)

車の装束さなから隨身一人二人仰せおきてたれ。

(源、若紫)

なほうしろ安くをおもほしたれ。

(源、寄生)

前提の用法も殆すべてに通ずる用法なり。こは條件と事實との二に分ちていはむ。

條件前提は又假設條件と實在條件とに分つべく、假設條件は又更に順續假設と戻續假設とに分つ。

順續假設はすべて未然形より助詞「ば」に接して成立す。未然形を有するものは皆之を有す。用言の本幹、一も之を有せざるものなし。複語尾にて之を有するものは屬性を助くるものすべて、打消の「ず」と確定をあらはすものと設想の「べし」「まじ」となり。その例は各詞の條にあげたり。

戻續假設は形容詞は未然形より動詞形式動詞、純粹形式用言は原形より助詞「と」「ども」に接するなり。形式形容詞はこの法を有せず。複語尾にて之を有するは屬性を助くるもの、打消の「ず」確定の複語尾なり。共に原形よりす。その他は有せず。實例はそれらの語の條にあげたり。

實在條件はすべて已然形よりす。已然形を有する用言及複語尾は殆之を有すと見ること。但二三の特例あり。今、實在條件も亦順續と戻續との二種ある

ことを注意す。さてすべての用言は已然形の存する限、これを有す。形式形容詞は已然形なし。複語尾にては屬性を助くるもの、打消ず、豫想まし、確定、回想の複語尾、設想べし、めりまし以上はこの用法あり。豫想の「む」設想の「らむ」は戻續の用法を有するのみ。全く有せぬは「らし」のみなり。これらも亦各の條に實例をあげたり。事實前提は連體形を以てし、がに「を」の助詞にて示すなり。この用法なきは設想、らしなり。その他「まし」は「に」「が」に接せず。されどこれらはこの用法にはいはず。助詞の條参照すべし。

すべて連體形は體言を裝定する用法を有するものなれど、複語尾の「らし」はこの用法を有せず。

連用形は重文の前句たるもの、述語たる用法を有するものなり。動詞形容詞、動作形状の二形式用言皆之を有す。

文をひきとりて庭におりて見たてるとわびしうねたくおひてゆけど。

(枕、五)

御せうそこもき、君たちもまわりたまふ。

(宇、藏開、下)

思ひしもしるくたゝひとりふしおきす。

(蜻蛉上)

さすがに人の上をばもどき物をよくいふ。

(枕、六)

日ごろは御文あそばし、よるは御てならひあくまでせさせたまふ。

(宇、國讓、上)

もじのかずしらず、春は冬の歌をよみ、秋は春の歌をよみ、梅をば菊などよむやうは侍らむ。

(枕、五)

女房のいてたるさまほめ、そしり、このごろはこと事なかめり。

(枕、五)

御ちやうのまへにしつらへす、内膳に御へついわたしてたてまつりなどしたる。

(枕、五)

中のしなはさきのおやにむくいしものしなはゆくすゑの子どもにむくいむとのたまひし木なり。

(宇、俊蔭)

うちにきんだちもやのみすにかべしろかけ、みすのうちに四尺の御屏風どもたてわたしたり。

(宇、祭の使)

春は花をみ、秋は紅葉をみるとて。

(宇、俊蔭)

しろかねこかねのおき口をしまきゑらてんをしゑをかきなどすべてまねび
つくすべきやうもなかりけり。
(狭衣、三)

純粹形式用言にては連用形と原形と同じ形なる故に、重文なるか單文の重なり
たるものを區別すること難し。但、重文なりと認むるものゝ例をあぐ。

わが君をば心ばせあり物おもひ知りたらむ人にこそみせ奉らまほしけれ。

(源、東屋)

なほほいもありあの人とわたらむとおほさばまかりなむ。

(狭衣、一)

まして情あり好ましき人に知られたるなどはおろかなりと。

(枕、六)

複語尾にて之を有せるものは屬性の複語尾、確定の「つ打消のず」なり。

世にやんごとなきものにおもはれかしこき人の御前に近づきまゐるるべ

き事などとはせたまふ御文の師にてさふらふはめてたくこそおほゆれ。

(枕、五)

只いみじうにくまれ、あしうせられてあらむ。

(枕、五)

きぬたのおともこなたかなたきゝわたされ空とぶ雁の聲とりあつめて忍び

かたき事多かり。

源、夕顔

今日は常よりもなごりこひしうおもひいでられ、わりなうおぼゆればきこ

(和泉、記)

三條どののものしたまひてそこなはれたるところつくろはせ、池はらはせ、御
てうどどもみなあれば、おき所あるべきやうにしつらはせ、みすかけさせたまふ。

(宇、國讓、中)

笏ハ老部爾持セ佛舍利ハ富部爾令持タリ。

(天滿宮託宣記)

ひくにはあらずをなどをてまさくりにして。

(枕、五)

されどわかければ文もをさをさしからず、詞もいひしらず、いはんや歌をよま
ざりければ。

(伊勢、語)

我がこひはゆくへもしらず、はてもなし。

(古戀、二)

ひんかしおもてはわきてうまばのおとゝつくり埒ゆひて、五月の御遊ところ
にてみづのほとりにさうぶうゑしげらせてひかひにみまやして世になきじや
うめどもをとゝのへたてさせたまへり。

(源、少女)

ある人あがたのよとせいつとせはて、例のことどもみなしをへて、解由などとりてすむたちよりいでて、舟にのるべきところへわたる。

(土佐)

動詞の原形は之を重ねて修飾語となすことあり。

手をするする申す。

(宇、あて宮)

とりもなさぬときくきくねにければ。

(蜻蛉上)

人もこそきけとおもふおもふいけば。

(和泉記)

のり弓にわななくわななくひさしうありてはづしたる矢のもてはなれてことかたへ行きたる。

(枕五)

さらば是へやかぎり侍るべからんとわぶわぶ車にのりぬ。

(狭衣三)

手をきるきるつんだる菜を。

(土佐)

まろならばかばかりの御思ひをみるみるえかくてあらじ。

(源浮舟)

めにみすみすきえいり給にしことなどかたる。

(源浮舟)

人の國境までもおひつかはされ流罪のつみともならばいかせんとておづおづ申す。

(宇、あて宮)

この君をいかにしなしきこえぬるにかとわびしさにふるふふるふつとひかへたり。

(源紅葉賀)

手をとるとるおぼつかかなからぬもの、師なりかし。

(源若菜下)

なくなくまじり給へしかど。

(宇國讓上)

望月の駒よりおそくいてつればたどるたどるぞ山はこえつる。(後雜二)

惟光いりてめぐるめぐる人も音するかたやとみるにいさゝか人げもせず。

(源蓬生)

第三節 助詞

一 格助詞

格助詞は「つ」「の」「が」「を」「に」「と」「へ」「より」「から」の九あり。

「つ」は名詞をうけて連體語とするものにして多くはこの期に活動せざる如く説かるれども、必しも然らずして頗活勢を呈せり。次に例を示す。

あきつ方になりけり。
 ひるつ方ある文をみれば。
 くれつ方きこゆ。
 はしつ方に。
 冬のはてつ方雪のいみじうふる日。
 夜さりつ方になりぬれば。
 はしつ方のあましにかゝり。
 さしぬきのすそつかた。
 ひるつ方。
 夕つかた。
 はじめつかた。
 かたつ方いとあをく。
 秋つ方いひやりける。
 冬つ方麗景殿のほそどのに。

(蜻蛉上)
 (和泉記)
 (和泉記)
 (蜻蛉上)
 (和泉集)
 (宇藏開上)
 (源帚木)
 (源若菜上)
 (枕一)
 (枕一)
 (枕二)
 (枕七)
 (公任集)
 (公任集)

はてつ方はたゞうちきくのあはれなるを。
 夏つ方より母上なやましげにしたまふを。
 さいつころ。
 さいつころまかりくだり侍るついでに。
 もとつ香のほへる君が袖ふれば。
 もとつ妻に今は限りとみえしより誰ならすらむわかふし床。
 かばかりなるもとつ人をおきて。
 かひつものもてまゐれるを。
 末つかたのがくはなやかににぎはしくきこゆるに。
 昔つ人のはい。
 たゞ末つかたをいさゝかひきたまふ。
 御やまひの末つかたにめしよせて。
 あまつ空なる人をこふとて。
 あまつ空なるつゆやあくらむ。

(狭衣三)
 (狭衣四)
 (宇沖つ白波)
 (源若紫)
 (源紅梅)
 (好忠集)
 (源浮舟)
 (源須磨)
 (源御法)
 (土佐)
 (源横笛)
 (源橋姫)
 (古戀一)
 (伊勢語)

あまつ空にも例にたがへるを。

(源、薄雲)

をとめ子も神さびぬらし天つ。そてふるき世のともよはひ經ぬれば。

(源、少女)

とのもりのとものみやつ。こ心あらば此春ばかり朝ぎよめすな。

(拾、雜、春)

又このむすめあねにあたるあやつ。こといひてありけり。

(大和、語)

いはけなげなるしたつ。方もまぎらはさんなどおもふを。

(源、松風)

たちさまよふらむしもつ方。

(源、夕顔)

しもつ方の京極わたりなれば。

(源、落標)

わがかみの雪といそべのしら波といづれまされり沖つしまもり。

(土、佐)

風ふけば沖つ。白波たつた山。

(古、雜、下)

たゞ前期なるつ。の用法と異なるは、この期のは、上下共に體言殊に名詞なること、

(古、雜、下)

その下なる語が意義上の主にして其上なる語は修飾の用をなすなり。而、その修飾する語は主たる語に對して、多くは比較關係を示す傾向を呈せるを特徴とす。

「の」が「と」の意義上の差は前編に述べたる所なり。而、その用法上にも差あることをいひたるがこの期に至りてもその差依然たり。寧、その區別のやゝ判然たるに至れる點ありとす。

「の」は先連體語を示す。その連體語たるものは第一、名詞なり。

橘の。小島の。崎の。山吹の花。

(古、春、下)

春の。かぎりの。けふの。日の。夕ぐれに。さへなりにけるかな。

(伊勢、語)

かけきやは河せの波も立ちかへり君がみそぎのふぢのやつれを。

(源、少女)

かの四の君の御はらの姫君

(源、落標)

かの君ばかりぞ。

(宇、國、讓、中)

かの御手ならひとり出せり。

(源、空蟬)

かの四の君の御はらの姫君。

(源、落標)

かくてはその人ならずなどいひて

(枕、五)

を。の。こと。なく。もの。ぞ。かな。し。き。
 こ。の。別。當。の。少。將。と。思。は。せ。た。ま。へ。る。な。め。り。
 こ。の。世。に。名。を。え。た。る。舞。の。師。の。を。の。こ。ど。も。
 あ。の。北。の。方。は。い。み。じ。う。病。み。ふ。し。け。り。
 あ。の。あ。た。り。に。ら。う。じ。給。ふ。所。々。の。人。
 い。づ。れ。の。世。に。か。秋。を。し。る。べ。き。
 い。づ。れ。の。御。時。に。か。
 い。つ。の。ほ。ど。に。か。
 い。つ。の。ま。に。さ。つ。き。き。ぬ。ら。む。

(伊勢語)
 (狭衣、一)
 (源、紅葉賀)
 (落窪、二)
 (源、浮舟)
 (後、雜、四)
 (源、桐壺)
 (枕、二)
 (古、夏)

第三、數詞を以てするもの。

よ。ろ。づ。の。も。の。い。れ。さ。せ。た。ま。へ。り。
 四。の。君。の。御。は。ら。の。姫。君
 上。の。社。の。一。の。橋。の。も。と。に。あ。な。る。を。き。け。ば。
 我。ふ。た。つ。の。道。し。た。ふ。を。き。け。と。な。む。

(宇、國、讓、中)
 (源、落標)
 (枕、七)
 (源、帚木)

第四、副詞を以てするもの。

た。い。の。人。に。は。み。え。ず。
 い。ろ。い。ろ。の。病。を。し。て。
 夜。ひ。と。夜。い。ろ。の。事。を。せ。さ。せ。た。ま。ふ。
 つ。ひ。の。別。れ。を。の。が。れ。ぬ。わ。ざ。な。め。れ。ど。
 な。だ。か。ら。な。ら。ん。の。み。こ。そ。人。は。つ。ひ。の。こ。と。に。は。侍。め。れ。
 つ。ひ。の。た。の。み。所。に。は。思。ひ。お。く。べ。か。り。け。る。
 ま。づ。の。人。々。お。は。す。
 か。り。そ。め。の。か。く。れ。が。と。は。た。み。ゆ。め。れ。ば。
 さ。こ。そ。は。つ。ひ。の。事。な。ら。め。と。お。ぼ。し。た。り。
 お。ほ。よ。そ。の。な。び。く。尾。花。に。ま。か。せ。て。も。み。む。
 わ。り。な。き。ま。れ。の。細。道。を。わ。け。給。ふ。程。
 あ。は。れ。の。事。や。
 と。か。く。の。事。

(宇、吹、上、下)
 (竹、取)
 (源、落標)
 (源、椎木)
 (源、夕霧)
 (源、帚木)
 (源、若菜、上)
 (源、夕顔)
 (狭衣、一)
 (蜻蛉、記)
 (源、浮舟)
 (源、帚木)
 (源、夕顔)

さての御かたがたにもみなまてまつれ給ふ。

(宇藏開下)

あはの御ことわりや。

(源竹川)

あばらの宿にふれるしら雪。

(好忠集)

あだの風ふきて。

(宇俊蔭)

いさゝかの事も御心にたがはじと思ふに。

(源夕顔)

おぼろげの事ならて。

(源柏木)

おぼろげのものにあらずとみえたり。

(源葵)

おぼろげの人の見奉りゆるすべきにあらず。

(源横柱)

たちまちのうけはせねど。

(狭衣一)

第五形容詞の語幹を以てするもの。

あいきやうなの雨や。

(落窪一)

あなめてたの人や。

(源早蕨)

わか御心ありさまや。

(源葵)

あいなさかしらや。

(源關屋)

あなあぢきなものあつかひや。

(源若菜上)

かたくなしうかるがるしの世やとものしう覺えたまへど。

(源夕霧)

今さらにわかわかしの御まじらひや。

(源夕霧)

いふがひなの事や。

(源帚木)

口をしの花のちぎりや。

(源夕顔)

あなをかしの人やとぞ見えて侍る。

(紫日記)

第六體言に准ぜられたる語句文章を以てするもの。

つとめて物語しての序に。

(落窪一)

きゝいれずいひいひてのはてはうちとけてねぬる後もはづかし。

(枕六)

ひるも人やみむのうたがひなし。

(蜻蛉中)

むねいたきめをやみむのはゝかりに思ひさだむることもなくてなむ。

(源東屋)

夕されば思ひぞしげきまつ人のこむやこじやのさだめなければ。

(源東屋)

(後戀、六)

君やこむ我やゆかむのいさよひに横の板戸もさゝずねにけり。(古戀、四)

うての使にさゝれて少將にてくだりけり。(大和語)

連體語たる語をして主たる體言を領し去らしめ、のにてその位置を暗示することあり。

そはいづこのぞととへば。(枕、四)

さて扇のにはあらてくらげのなりときこゆれば。(枕、五)

はじめのは僧都の君のぬかをさへつきてとりたまひてき。(枕、七)

清僧都のにやあらむ。(枕、十一)

同じ人の御子のかれのまづおひいて、これはのちにおひ出てたまへるにこそあれ。

いづくのならむ。(宇、藏開、下)

梨つぼの御はらのなむむたまふべき。(宇、國讓、中)

きさいばらのはいづれともなくけだかくきよげにおはす。(源、匂宮)

竹のはにちりかいらなむ梅の花雪の中のをとるとみるべく。(伊勢集)

冬の雪いつごのに劣らずとおもへど。(保憲女集)

昔のと今のといはとおほかるをまつ何事をわれかたりけむ。(赤染集)

此御かたちありさまになずるふばかりのはありがたきわざにこそ。(狭衣、一)

これより一轉して「のを以て、がの下に加へて體言の空位を補はしむることはじまれり。

人妻とわがのとふたつ思ふにはなれこし袖はあはれまされり。(好忠集)

修飾語を示すもの。この時は體言にのみ附屬す。

例のほどへぬ。(和泉記)

例のきこえ侍り。(和泉記)

こゑは昔のうとからぬかな。(後、雜、一)

ゆく水の早くぞ人を思ひそめてし。(古戀、一)

この程の事くたくだしければ例のもらしつ。(源、夕顔)

例のはらだちえんずるに。

(源、帚木)

初草のなどめつらしきことのはぞ。

(伊勢、語)

この用法は次の如くにはあらはるゝことあり。

このひく翠の同じさまなる琴錦の袋に入れたる云々。

(宇、俊蔭)

なかたのひとしき形なる人を見るまゝにめてたしとみること限なし。

(宇、吹上、上)

御うぶやしなひさきのおなじごとなり。

(宇、あて宮)

わが御世の同じごとにておはしまいつるを。

(源、櫛)

年ころ親のおなじ心にたのみすごしけるさへ。

(狭衣、一)

とのいひとつ心にあながちにきこえたまはざりけり。

(狭衣、三)

たゞ入道のみやのおなじさまにやとおほゆるに。

(狭衣、三)

むすめのひとつがきなればちらさじ。

(狭衣、四)

これは前の例ととりわきていふべきものにあらねど下に「同一なり」といふ意の語あるが故に「といふよりも」といふことの近世専なるを以て、特に人目をひきた

るまでのものなり。

形式形容詞の客語に属することあり。そは體言なるあり。

又もとの如くにかへり給ふべきさまになどこゝろくるしきまゝにいのり申したまふ。

(源、須磨)

あのが思ひはこの雪のごとくなんつもれるといひけるをよめる。

(古、雜、下)

え思ひの如くもしあへてかたの如くなんいもひの御はちまゐるべきを。

(源、若菜、下)

花のごと世の常ならば。

(古、春、下)

この御方東宮の御おやのごとして侍らひたまへば。

(蜻蛉、上)

げにあのごと御心にしみにけり。

(源、螢)

副詞なるあり。

この歌もかくのごとくなるべし。

(古、序)

粟麥、豆、さしげ、かくのごときさうやくのものあり。

(宇、藤原君)

さ。ごときひじやうのこのさふらはんをばいかてかうけたまはらぬやうは侍らむ。

(源、浮舟)

附屬句の主語を示すものは四様あり。第一連體句の主語を示すもの。

鶯の谷より出づる聲なくば。

(古、春、上)

人のいひもらさん事をき、つけたらんととき。

(源、帚木)

繪に山寺に法師のゐたるまへに日くれて木こりどものかへるところに。

(和泉續集)

春のきる霞の衣。

(古、春、上)

君の御母君のかくれ給へりし秋ならん。

(源、柏木)

第二修飾句の主語を示すもの

香をだににほへ人の知るべく。

(古、冬)

御あそびなどを好ましう世のひびくばかりせさせ給ひつゝ。

(源、葵)

いと人わろうかたくなにふりはつるもさきの世のゆかしうなむ。

(源、桐壺)

なる梨のなりもならずもねて語はむ。

(古、東歌)

第三主語たる准體句の主語を示すもの。一般の准體句もこの格なり。

ことなる序ならて對面の難からむを口惜しく思ひ給ふる。

(源、楨柱)

葎あひてあれたる宿のうれたきはかりにも鬼のすだくなりけり。

(伊勢、語)

いみじき天人のあまくだれるをみたらむやうにおもふも。

(源、手習)

その打とけて傍痛しと覺されむこそ床しけれ。

(源、帚木)

第四伴句の主語を示すもの。

人の心の花とちりなば。

(古、戀、五)

年のへぬれば。

(古、雜、上)

水の上に浮べる船の君ならば。

(古、雜、上)

君こふる涙の床にみちぬれば。

(古、戀、二)

身の白雲になりなましかば。

(後、雜、二)

わかれゆく道のくもぬになりゆけば。

(後、別)

されどこの扇の尋ねべき故ありて見ゆるを。

(源、夕顔)

かゝる序に對面のあらば、いかにうれしからむ。

(源、行幸)

身よりあせのあゆれば、つくろひたてたる髪などもあがりやすらむと覺ゆ。

(枕、十一)

そこのきやうざくの姫君たちのひきこめられなば世にはえあらじ。

(源、梅枝)

故少貳のいとなさけびきらさしくものし給ひしをいかてかあひかたらひ

申さむと思ひ給へしかども。

(源、玉鬘)

しのゝめのほからくとあけゆけば。

(古、戀三)

單文の主語を示すことあり。さるときはその文の構成上、何等かの條件存す。

第一、擬嘆述法の場合。

春たてば花とやみらむ白雪のかゝれる枝に驚のなく。

(古、春、上)

夜やふけぬらむ袖のつゆけき。

(古、別)

かりにだにさてとふ人のなき。

(後、雜、二)

立田の川の水のにされる。

(拾、物名)

入りにし人のおとづれもせぬ。

(古、冬)

うたてにほひの袖にとまれる。

(古、春、上)

第二、中止述法の場合。

見ても心のなぐさまなくに。

(古、戀、四)

花ずしきほに出てこひば名ををしみ下ゆふひものむすぼほれつゝ。

(古、戀、三)

唯この姫君のてんつかれたまふまじくとよろづにおぼしてのたまふ。

(源、螢)

第三、疑問の句の場合。

いつのまにいなばそよぎて秋風のよく。

(古、秋、上)

何かわかれのかなしからまし。

(古、別)

うへもなし。いかなる人の見たるぞと驚きて。

(蜻蛉、下)

よからぬ狐などいふなる者の戯れたるか。

(源、若菜、下)

第四、許容希求の句の場合。

宮の。とくおよすけさせたまへかし。
 折れ返りおきふしわぶる下をぎの末こす風を人の。とへかし。
 おきなかの水はいとゞやぬるからんことはまなるを人のくめかし。

(狭衣、三)

第六、述語が複語尾を有せる場合。

春風の。いたくふくらし。
 春日野のわかなつみにや白たへの袖ふりはへて人のゆくらむ。
 いかにせよとか風のふくらむ。
 心ありとや人の。おもはむ。

(六帖、一)

(古春、上)

(古春、下)

(古戀、四)

第七、述語が終助詞を有する場合。

初雁のけさなくこゑのめづらしきかな。
 兵部卿の宮の人よりはこよなくものしたまふかな。
 「の」は又連體語たる用言の補語たるものを示すに用ゐることあり。

(古秋、上)

(源、登)

式部の司のこゝろみの題をなずらへて御題たまふ。大殿の太郎君の心み給ふべき故なめり。

(源、少女)

又次の如き例もあり。これ希望の目的を示したるものなり。

右大將の君に馬の奉らまほしく思さるれば。

(宇、初秋)

「の」は又副詞に對しての客語を示すことあり。

かみは尾花のやうなるそぎ末も。

(枕、九)

例のやうに心あわたししからねば。

(蜻蛉、下)

見る人も哀にむかし物がたりのやうなれば皆なきぬ。

(蜻蛉、下)

わかき子のやうにおぢ給ふめれば。

(源、野分)

「の」は又喚體句を構成する爲に、結體せる形容詞の上に冠する體言に附屬す。

さる歌のきたなげさよ。

(伊勢、語)

願をかなふる事のうれしさとのたまひて。

(竹、取)

さく花におもひつく身のあぢきなさ。

(古、序)

我がこひを人めにかくる事のわびしさ。

(後、戀、六)

秋はぎのしがらみふせてなく鹿の目にはみえずて音のさやけさ。

(古、秋、上)

「が」はその用法に於いて頗るに似たれど、稍趣を異にする處あり。これを説くには寧上に來る語によりて區別するを便とす。

代名詞「わ」「そ」「これ」「それ」「かれ」「あれ」たに附屬して連體語客語たらしむ。連體語の例

わが心ざしを見たまへばこそ。

(宇、國讓、中)

又みなこれが事をかれにかたり、かれが事はこれにいひきかすべかめるをわが事をばしらて。

(枕、六)

これが事をきかばやと思ふに。

(枕、六)

たれがふみをたれがとらせしぞといへば。

(枕、七)

そが中にいまはた大將などさてさぶらへば。

(宇、國讓、中)

いかてかこれがかへり事きこえむとおもへど。

(宇、國讓、中)

これはたがてぞとあつまりてみたまへどえしりたまはず。

(宇、國讓、中)

よべもそれがあなたによもすべて此比はうちしきり見ゆる人の云々。

(枕、十一)

かゝる際の「が」の意との意とは主點を上又は下におくことの差あることは前編にいへる如し。

客語の例。

わが如く物や悲しき。

(古、戀、二)

「が」の用法の全くの異なる點は用言を連體形にて體言に准じたる時のものに附屬することなり。而、そは主語、連體語、客語にあらはる。

主語の例。

思ひいつるがうれしげもなし。

(後、戀、一)

よき男のわかきがみたけさうじしたる。

(枕、六)

さもあらむのちにはえほめ奉らざらむがくちをしきなり。

(枕、七)

高野は弘法大師の御すみかなるがあはれなるなり。

(枕、九)

式部大輔駿河のぜんしなどいひしがさせしなり。

(枕、二)

此御事のしはすもすぎにしが心もとなきに。

(源紅葉賀)

炭をかさねおきたるいたゝきに火どもおきたるがいとむつかし。

(枕十一)

つらに離れて後るゝ雁をしひて尋ねたまふらむがふくつけきぞかし。

(源常夏)

かゝるものをさきこゑなしけむがおそろしき。

(宇國讓中)

こまのゝ物語はふるきかはほりさがし出てもいにしがをかしきなり。

(枕九)

されど自然に宮づかへ所にも親はらからの中にも思はるゝ思はれぬがあらぞわびしきや。

(枕十)

さふらふ人さへかくもてなすがやすからぬ。

(源紅梅)

もとより勝れざりける御かたちのやゝさだすぎたる心地してやせやせにみぐしすくななるなどがかくそしらはしきなり。

(源少女)

落窪の君ゐておはせ一人とまりたまはむがいとほしき事。

(落窪一)

連體語の例。

ぬるがうちに見るをのみやは夢といはむ。

(古哀傷)

思ふがためはあかずぞありける。

(後賀)

こゝらよをきくが中にも悲しきは人のなみだもつきやしぬらむ。

(後哀傷)

藤原の瑠璃君といふが御ために奉る。

(源玉鬘)

そのころこまうどの参れるが中にかしき相人ありけるをきこしめして。

(源桐壺)

客語の例

とぶがごとくに都へもかな。

(土佐)

ゑにかける女を見ていたづらに心をうごかすが如し。

(古序)

いひしが如くにすむ所に至りぬ。

(宇俊蔭)

さすが如くにて射たる。

(宇初秋)

このことをくい思ふもほむらにもゆるが如し。

(宇吹上、下)

このあらむいのちは葉のうすきが如し。
體言を以て連體語主語とせるあり。

(源、手習)

連體語の例

はしがはしにもおぼえたまはぬはなほたぐひあらじ。
しもがしもの中にはなてふことかきこしめし所侍らんといへど。

(源、紅梅)

かみがかみはうちおき侍りぬ。

(源、帚木)

事がなかになめなるまじき人の後見の方は。

(源、帚木)

式部がやうにやいかてかさはなりたまはむ。

(源、賢木)

右近が局は佛の右の方に近き間にしたり。

(源、玉鬘)

ひるのこがよはひにもなりにけるを。

(源、松風)

かのげんがゆゝしさをおぼしなぞらへたまふ。

(源、螢)

三日が程は夜がれなくわたりたまふを。

(源、若菜、上)

がにて連體語となれるものは、の如く主たる體言を領し去ることあり。

此歌はある人いはいく大伴黒主がなり。
誰がをかたらひたるにか。

(古、雜、上)

此歌はある人在原のときはるがともいふ。

(落窪、一)

五せちのあしたにかんざしの玉の落ちたりけるを見てたがならむととぶら
ひてよめる。

(古、賀)

主語を示すものはその句にある種の條件存せるものに限る。その例次の如し。
附屬句の主語を示すもの。

(古、雜、上)

たかみつがとのもりのすけなるはあをいろのあを紅のきぬすりもとろかし
たるすむかんはかまにてうちつづきまうてたりけるに。

(枕、六)

たれがしたるにあらむ。

(枕、七)

なにがしが及ぶべきほどならねば。

(源、帚木)

とのゐ人がさむげにてさまよひしなど哀におぼしやりて。
はしるがはらたちのしりて人々をはしたなくいひしをおぼしいづるに。

(源、橋姫)

(狭衣、三)

單文にては擬喚述法に立てるものと。

さゝのはのさやく霜よをわが一人ぬる。

(古俳諧)

思ひの外に君がきませる。

(拾春)

雀の子をいぬきがにがしつる。

(源若紫)

疑問をあらはす場合のものにあらはる。

我こそはにくくもあらめわが宿の花見にだにも君がきまさぬ。(拾雜戀)

「がは又喚體句の主體をあらはすことあり。この時は用言の連體形の體言に准

ぜられたるものに附屬す。

夢にさへ人めをもるとみるがわびしさ。

(古戀三)

ながきよのやみにさへ惑はむがやくなさ。

(源稚本)

後の世をさへ迎り知り給ふらむがあり難さ。

(源橋姫)

「をは古今大差なし。」すべて動詞の動的目標を示すに用ゐらるし。

經由干與の對者をあらはす。||は經由の對者
||は干與の對者

ちじのおとどをどこひしく思ひきこえたまひける。

(源若菜下)

ふみとりわすれてをんなをとりにおこせたり。

(蜻蛉上)

ただ此人を時のまわすれずおぼしいづ。

(源浮舟)

人の心をいかゞたのまむ。

(六帖四)

やまと歌は人の心を種としてよろづの言の葉とぞなれりける。(古序)

力をも入れずして天地をうごかし目に見えぬ鬼神をもあはれとおもはせ、男

女の中をも和げ猛きものゝふの心をも慰むるは歌なり。

(古序)

女かへての初もみちをひろはせて歌をよみてかきつけておこせたり。

(古序)

初かりのはつかに聲をきしより中ぞらにのみ物を思ふかな。(古戀一)

(伊勢語)

それをさへはづさせ給ふな。

(宇國讓中)

うすものゝひとへをき給ひて。

(源常夏)

たれかかゝる事をさへいひきかせむ。

(枕三)

此人々かへるまでいもひをしてわれはをらん。

(竹取)

つかさをえさすとも兄にはまさらむ。

(落窪四)

心魂をまどはかさせたまふものかな。

(宇、國讓、中)

移動作用に對しては其の地點をあらはす。

いまなん此世のさかひをこゝろやすくゆきはなるべき。

(源若菜、上)

ひとたびいへをいてたまひなば。

(源、御法)

主をはなるべき身とおもひたまへらましかば。

(源、須磨)

わが國の内をはなれまかりありきしに。

(竹、取)

秋風にさそはれわたる雁がねは物思ふ人の宿をよがなむ。

(後、秋、下)

かゝるついでに大きさいの宮おはします方をよぎてとふらひきこえたまは

ざらむもなさけなければ。

(源、少女)

いさゝかに世をわたらふ人もなし。

(宇、祭の使)

月のあかき夜門の前をわたるとて。

(拾、雜、上)

後涼殿のはざまをわたりければ。

(伊勢、語)

藤原のこれがかが、武藏介にまかりける時に送りに逢坂をこゆとてよみける。

(古、別)

梓弓春の山べをこえくれば道もさりあへず、花ぞちりける。

(古、春、下)

其の家のあたりをまかりけるをりに。

(古、戀、四)

高き山ふかき谷をおり登り罷りありきて。

(宇、俊蔭)

久しうすみける家を住まじと外へ移るに。

(貫、之、集)

曇りなき池の鏡に萬代をすむべきかげそしるくみえける。

(源、初音)

今日の用法とやゝ異なるは。

逢坂にて人をわかれる時によめる。

(古、別)

音羽山のほとりにて人をわかるとて。

(古、別)

これらは我が動くと共に對者も動くことをいへるものにして、人に別るといふ時とは考へ方を異にせるものなりとす。

次には時間の經由をあらはすことなり。これも、

年ごろをかくてすぐしはべりつるを。

(宇、吹上、上)

とあらん折もかゝらむきざみをもみすぐしたらん中こそ。

(源、帚木)

けふをもすぐしがたげなるさまにて。

(源、若紫)

風ふけど所もさらぬ白雲は世を經ておつる水にぞありける。
年をへてよばひわたりけるを。
(拾雜、上) (伊勢語)

の如く明に經過をあらはす語を用ゐたるは今もあれど、

たゞの人は一^レ生をそひてならふともさらにかくは侍らじ。
年ごろをすみし所の名におへば。
(宇、樓上、下) (土、佐)

こゝらの年をあかずもあるかな。
(土、賀)

怪しと人しれずこよひを心みむとおもふほどにはては消息だになくて久し
くなりぬ。
(蜻蛉、中)

の如き用例は今日には見る事難きものなり。されどこれとても時間經由をあら
はす點に於いては前の例と異なるにあらず。

「には靜的目標を示すに用ゐらる。」

動作作用の歸著する標的をあらはすもの。

そこなりける人によみておくりける。

人にわかなたまひける御うた。
(古、雜、下) (古、春、上)

君ならて誰にかみせむ。

かの宮の北の方に奉りける。
(古、春、上) (大和語)

志あるに似たり。
(土、佐)

櫻のちりすぎたる枝につけたまへり。
(源、須磨)

花鳥の色にも音にもよそふべき方ぞなき。
(源、桐壺)

ゐたちおぼしいとなみて限ある事に事をそへさせたまふ。
(源、桐壺)

いかなるいきぶれにかゝらせ給ふぞや。
(源、夕顔)

これにをとほしてたまはらむ。
(枕、十)

家のほど身の程にあはせて侍るなり。
(枕、二)

上は王命婦に委しき事とはまほしう思しめせど。
(源、薄雲)

用言に對してその原因出自をあらはすもの。

秋はつるにぞかなしかりける。
(宇、吹上、上)

學問などに身を苦めむ事はいと遠くなむおぼゆべかめる。
(源、少女)

たゞ涙にひびて明しくらさせたまへば。
(源、桐壺)

りんじのてうがくに夜ふけて。

(源、帚木)

院の御思ひにやがて尼になりたまへるかほりなりけり。

(源、榊)

あはれなる雪の雫にぬれぬれ行ひたまふ。

(源、榊)

雪の光にいみじく艶なる御姿を見出して。

(源、榊)

又今更にかひなき事によりて我名もらすな。

(源、玉鬘)

比較の標準をあらはすもの。

ちる花のなくにしとまるものならば、われうぐひすにおとらましやは。

(古、春、下)

宵のまにはかなく見ゆる夏蟲にまどひまされるこひもするかな。

(古、戀、一)

此の人々の深き志はこの海に劣らざるべし。

(土、佐)

さしあたりて世のおぼえはなやかなる御方にもおとらず。

(源、桐壺)

我はがほにて家の内をかざり人におとらじとおもへる。

(源、帚木)

横川にかよふ人のみなむ此わたりにはちかきたよりなりける。

(源、夢浮橋)

間接作用の對者をあらはす。

かたの、少將には笑はれたまひけむかし。

(源、帚木)

人のしな高くうまれぬれば人にもてかしづかれてかくるゝこと多く。

(源、帚木)

見にくき形をもこの人に見やうとまれむとわりなく思ひつくるひ云々。

(源、帚木)

いかて思ふやうなる人にぬすませ奉らむ。

(落窪、一)

風に吹きならさせて海に連れてえのまずなりぬ。

(土、佐)

この七人の人に琴一づゝとらす。

(宇、俊蔭)

動作作用の存在落著する位地を示す。

むつきの十日ばかりのほどにほかにかくれにけり。

(伊勢、語)

東の五條のわたりにいとしのびていきけり。

(伊勢、語)

京にありわびてあづまにいきけるに。

(伊勢、語)

やがてみすのうちにいれたてまつりたまふ。

(源桐壺)

このみこを鴻臚館につかはしたり。

(源桐壺)

二條院におはしましぬ。

(源空蟬)

雲林院のみこのもとに花見に北山のほとりにまかれりける時によめる。

(古春下)

おほやけにすまひのころなり。

(蜻蛉中)

いづの國にながされ侍りけるに。

(後別)

水ぎはに車たてたり。

(蜻蛉中)

人の國の遠きにいきかくれなどして。

(枕十一)

いよいよなりとゞろきておはしますにつゞきたる廊におちかゝりぬ。

(源明石)

直接に人をさゝずし敬意をあらはす際の主語を示すに用ゐることあり。

院の御なやみ神無月になりてはいとおもくおはします。世の中にをしみき

こえぬ人なし。内にもおぼしなげきて行幸あり。

(源神)

大將殿もたひらかにやはおはしますらむ少將たゞ今は大將殿にはおひらか
におはしましき。
(宇吹上)

ようなきすすきすすきびなりや内にいかに宣はむとすらむ。
(源末摘花)

時間を示すものあり。

又のたまはせむこときこえさせにあすあさてのほどにもさふらふべし。
(蜻蛉下)

雲林院のみこのもとに花見に北山のほとりにまかれりける時によめる。
(古春下)

むつきの十日ばかりのほどにほかにかくれにけり。
(伊勢語)

さて曉方に松吹く風の音いと荒くきこゆ。
(蜻蛉下)

曉に御迎ひにもせよ。
(源帚木)

神無月に對の上院の御賀に嵯峨野の御堂にて薬師佛供養し奉り給ふ。
(源若菜上)

六日といふに例のおとゞにわたり給ひぬ。
(源若菜上)

又行爲の目的を示すあり。

人々たえずとふらひにく。

(土佐)

雲林院のみこのもとに花見に北山のほとりにまかれりける時に。

(古春下)

仲麿をもろこしに物ならはしにつかはしたりけるに。

(古旅)

何せむにかいま又かへりたまふべき。

(宇國讓中)

おのれがあやしのいほりにこのごろ花おもしろく侍るを御らんせさせに御
迎ひに参りたる。

(濱松語)

又のたまはせむこときこえさせにあすあさてのほどにもさふらふべし。

(蜻蛉下)

つきつき多かりけるを何せむにかはきゝおかむ。

(源若菜下)

東山にひじり御らんじにとなむ。

(源浮舟)

よるみそかにとりにわらはひとりゐていましてとりいださせて。

(宇吹上上)

白いとはらたしき事きこえさせになむ参りつる。

(蜻蛉下)

曉に御迎ひにもせよ。

(源帚木)

ことしのこの祈りに奈良の京の七大寺に御誦經布千段この近き都の四
十寺に絹百疋をわかつてせさせ給ふ。

(源若菜上)

野とならば鶉となりて鳴きをらむかりにだにやは君はこざらむ。

(伊勢語)

これより一轉してそれならぬものをそれに擬するをあらはすにも用ゐるなり。
扇をふえにふきたまへる夕ばえの。

(狭衣一)

おまへにわたれる廊をがくやのさまにしてかりにあぐらどもをめしたり。

(源胡蝶)

右近は云々ふる人の數に仕りなれたり。

(源玉鬘)

更に進みて變換作用の對者の資格をあらはす。

紅葉のいとおもしろくくれなゐに染めましたる色いろなれば。

(源手習)

三月になりぬ木芽すこしがくれになりて。

(蜻蛉下)

源氏に[○]なし奉るべくおほしおきてたり。

(源桐壺)

馬のかみものさだめのはか[○]せになりてひびらぎむたり。

(源帚木)

山づ[○]とにもたせたまへりし紅葉。

(源榊)

源氏の大納言内大臣になりたまひぬ。

(源滂標)

灰になりたまはむを見奉りて。

(源桐壺)

一世の源氏大納言大臣になりて後に更に更[○]にみこにもなり位にもつき給へるも

あまたの例ありけり。

(源薄雲)

秋の司召に太政大臣になりたまふべき事うちうちに定め申したまふついで
になむ云々。

(源薄雲)

山がつになりていたう思ひくづほれ侍りし年頃の後こよなくおとろへにて
侍るものを。

(源榊)

次には判定の客者を示す。

あやしう人こそ物いひさがなきものに[○]あれ。

(源夕霧)

琵琶こそ女のしたるにくきやうなれどらうらうしきものに[○]侍れ。

(源少女)

いと清らにねびまさり給ひにけるかな。わらはに物したまへりしを見奉り
そめし時云々。

(源榊)

頭中將にこそあなれ。

(源篝火)

何事にかはあらむ。

(源行幸)

もしは親なくて世の中かたほにありとも。

(源梅枝)

君は末の世にはあまるまで天の下のいうすくにも[○]のし給ふめるを齡ふりぬ
る人思ひすて給ふなむつらかりける。

(源藤裏葉)

いつか又春の都の花をみむ時うしなへる山賤にして。

(源須磨)

「に」は又用言に依立せるものを示すことあり。而には前期にては體言に附屬し
て修飾語たらしめたるが、その用法はこの期には發見することなし。この期に主
としてあらはるゝは副詞に附屬すると用言を重ねる中間に入るものとなり。
副詞に附屬せるもの。

うぶやいとおもしろうきよらにあり。

(宇國讓上)

しろき玉をつらぬきたるやうなるこそいみじうあはれにをかしけれ。

(枕 七)

いとまめにきすく人にておはす。

(源初音)

みだれそめじの心にていときすくにもてなしたまへり。

(源總角)

かろらかにうちたまはせたまへれば。

(源夕顔)

らうたげなるけはひ物清くかはらかに人の娘とおぼゆるさましたり。

(紫日記)

いとゞ人わろくかたくなになりはつるも。

(源桐壺)

いとかごかに侍るときこえて。

(源夕顔)

いみじくきはやかにみえたるなど。

(枕 三)

おいらかに鬼とこそむかひむたらめ。

(源帚木)

②御門の御使をばいかてかおろかにせむ。

(竹 取)

おぼろげにくしとおぼすにはあらざめり。

(宇國讓中)

花よりも人こそあだになりにつれ。

(古哀傷)

例の左あながちにかちぬ。

(源匂宮)

いとあてにうつくしく中々みえたまふ。

(源若紫)

かくてこの用法なるは重文の前句の述語の地位を負擔することあり。

きは殊に賢くてたゞ人にはいとあたらしけれど。

(源桐壺)

上手はいと勢ことにわるものは及ばぬ所多かめり。

(源帚木)

こゝらの齡にてめいわうの御代四代をなむ見侍りぬれどこの度のやうにふみどもきやうざくにまひがくものねどもとのほりて齡のぶることなむ侍らざりつる。

(源花宴)

よき車にのりておもしち氣色ほこりに物思ひなげなるさまして。

(源蓬生)

用言を重ねる際に中間に入るもの。

御前どもたゞおりにおりてたてる車どもをたゞのけにのけさせて云々。

(枕 九)

あさましくて涙のたゞいてきにいてくれば。

(源若菜下)

すのこよりたゞきに^{くれば}。

(源蜻蛉)

たゞいひに^{いひはなてば}。

(源夕霧)

夜はたゞあけに^{あく}。

(源浮舟)

足手などたゞすくみに^{すくみて}。

(蜻蛉上)

櫻花ふりに^{ふるとも見る人の衣ぬるべき雪ならなくに}。

(貫之集)

いれに^{いれよ}。

(落窪二)

たゞひえに^{ひえ入りて}。

(源夕顔)

又用言の連用形を以て副詞の如く修飾語の地位に立たしむる事あり。

やがてこの人をひきたてし^{おしはかりにいりたまふ}。

(源夕霧)

たゞいそがしに^{いだせば}。

(枕九)

おもはずにのみとりなしたまふ御心のへだてを。

(源松風)

心ときめきに見たまふことやありけむ。

(源藤裏葉)

あてにめてたさけはひや思ひなしに^{劣り優らむ}。

(源藤裏葉)

連體形をうけたるあり。

猶もあらじに^{戯ものしけり}。

(蜻蛉下)

「と」は變換作用と共同作用と稱謂との目標を示すに用ゐらる。

變換作用の目標

船とうかべる心をばつくし。

(保憲女集)

のとならばうづらとなりてなきをらむ。

(伊勢語)

みことなりたまひなば世のうたがひあひたまひぬべくものしたまへば。

(源桐壺)

蓮のつゆもあきらかに玉とみがきたまはむことかたし。

(源句宮)

まことのうつはものとなるべきを取り出さむにはかたかるべしかし。

(源帚木)

世のおもしとおはしつる人なればおほやけにもおぼしなげく。

(源薄雲)

世のくるしびとあるべき事をばとゞめ給ふ。

(源薄雲)

共同作用の目標

大夫やがて這ひのりてしりにこの事に口入れたる人とのせやりつ。

(源薄雲)

大將の女御の君と御遊ばしなどするに。

(蜻蛉、下)

わらはべとはらだちたまへるか。

(宇沖の白波)

五郎の君とてざれたる若人のあるとすぐろくうちたまふ。

(源、常夏)

世をば左大臣なかたゝのあそんとなんまつりごつべき。

(宇、國讓下)

比較の對象をあらはす。

(源、玉鬘)

かたちなどはかの昔の夕顔と劣らじや。

稱謂の目標

いてや上の品と思ふだにかたげなる世をときみはおぼすべし。

(源、帚木)

唯我がをんな御子たちと同じつらに思ひきこえむ。

(源、桐壺)

よき人の御すぢといふとも親にかずまへられ奉らず世に知られては何のか
ひかはあらむ。

(源、玉鬘)

あてきといひしは今は兵部の君といふぞ添ひてよるにげいてて船に乗りけ

る。

川尻といふ所近づきぬといふにぞ少息出る心地する。

(源、玉鬘)

とは又副詞に附屬することあり。その時は模様語にのみ附屬す。

(源、玉鬘)

めらめらとやけぬ。

(竹、取)

西の對、東の對にはなばなとしてすませたてまつり給ふに。

(落、雀、一)

ほいとわらふ。

(落、雀、二)

えねんじたまはてつぶつぶとなきたまふを。

(宇、國讓、中)

つぶつぶときよらなり。

(源、横笛)

さくりもよよとなきたまふ。

(源、總角)

御ぐしいろにて柳の糸のやうにてたをたをのみゆ。

(源、竹川)

髪はすこしいろなるが筋もみえずこまごまと翡翠などいふらむやうに。

又すみのなかに石こもりてぎしぎしときしみたる。

(濱、松)

怪しと思ふ程にふとあけてければ。

(枕、二)

(蜻蛉、下)

車寄せばふと乗れよとうち笑ひて出てられぬ。

(蜻蛉下)

この頃空のけしきなほりたちてうらうらとのどかなり。

(蜻蛉下)

又ほろほろとうちなきて出てぬ。

(蜻蛉上)

かも川のほどにてほのぼのとあく。

(蜻蛉中)

今はいとあはれなる山寺につどひてつれづれとあり。

(蜻蛉上)

風あらゝかに吹きしぐれさとしたる程。

(源花宴)

つやつやと美げなるさまぞかぎりなき。

(源御法)

とは又用言に附屬せるものあり。この時は又、にの如く用言を重ねる中間に入ることあり。

世にありとある人は。

(枕一)

こりともこりぬかゝるこひせじ。

(後戀六)

知りと知りたる人。

(蜻蛉中)

山の畝に入りといりぬる月なれば。

(清正集)

きときては河のほりえの水と淺み。

(土佐)

いきといきてたちかへらむも心ぐるしなど。

(源蜻蛉)

時雨にしぬれとぬれぬることのはは。

(伊勢集)

同じ名をたちとたちなば唐衣きてこそなれめうらぶるゝまで。

(六帖五)

いきとしいけるものいつれか歌をよまざりける。

(古序)

知りと知りたる人法師に至るまで若君の御よろこびきこえにきこえにとお

(蜻蛉中)

こせいふを。

又異なる用言の連なる間に入ることあり。

木々の木の葉のちりとまがふに。

(古秋下)

又すべて同一の語を繰返すを助くるあり。

よの中はいさともいさや風の音は秋に秋そふ心ちこそすれ。

(後雜四)

うれしともうれし。

(源玉露)

とは又體言と體言とを複合せしむるに用ゐることあり。その例次の如し。
夏と秋とゆきかふ空の通ひぢはかたへすゝしき風やふくらむ。(古夏)
春と秋とさくをかしげなり。(枕三)

みす。とみ几帳。との中に入れて。

(宇、國、讓、中)

小侍従と辨とはなちて又知る人侍らじ。

(源、橋、姫)

其の柱と屏風とのもとによりてわがうしろよりみよ。

(枕、六)

この對の前なる紅梅と櫻とは花の折々に心とめてもてあそびたまへ。

(源、御、法)

この宮とひめ宮とをぞ見さしきこえたまはむこと口惜しく哀におぼされける。

(源、御、法)

とる方なくくちをしききは。というなりとおぼゆばかりすぐれたるとは數ひとしくこそ侍らめ。

(源、帚、木)

かくその複合せらるゝ各語の下に附屬するを通例とすれど必しも然らず、次の如き例あり。

皆人どもはいきちりて乳母。この人二人なむとりわきておぼしたりしも忘れがたくて。

(源、蜻、蛉)

君と我なほしら糸のいかにしてうきふしなくてたえむとぞおもふ。

(蜻、蛉、上)

君と我いもせの山も秋くれば色かはりぬるものにぞありける。

(後、秋、下)

こは上なる語にのみ附屬せる例なるが、次のは下なる語にのみ附屬せるものなり。

物見車大將中納言とをみていふやう。

(宇、國、讓、下)

ふるきあたらしきと。一くだりつゝひきつゝみて。

(蜻、蛉、上)

「へ」は動作の進行する其の目標所在の方向を示す。

ある人男女もろともに人の國へまかりけり。

(古、旅)

友だちの人の國へまかりけるによめる。

(古、別)

あづまの方へ友とする人ひとりふたりいざなひていきけり。

(古、旅)

相知りて侍りける人のあづまの方へまかりけるをおくるとて。

(古、別)

京へまうてくとて。

(古、雜、下)

但馬の國の湯へまかりける時に。

(古、旅)

僧正遍昭がもとに奈良へまかりける時に男山にて。

(古、秋、上)

男のいせの國へまかりけるに。

(後、別)

遠き國へまかりける友たちに。

(後、別)

信濃へまかりける人に。

(後、別)

物へまかりける人に。

(後、別)

内へまわりたまふに。

(伊勢語)

昔男あづまへゆきけるに。

(伊勢語)

むさし野へゐてゆくほどに。

(伊勢語)

男京へなんまかるとて。

(伊勢語)

あねのさきだちてなりたる所へゆくを。

(伊勢語)

かふちへいぬるかほにてみれば。

(伊勢語)

かふちへもいかずなりにけり。

(伊勢語)

年毎の櫻の花ざかりには其宮へなんおはしましける。

(伊勢語)

なにかは我が子のいませむかたにはいづちへもいづちへもいかざらむ。

(伊勢語)

右大將いづくへぞ紀のくにふきあげのはまのわたりへなりあるじのぬしも

し源氏のみもとへか。

(宇、吹上、上)

あなたへふねにてみなさしわたる。

(蜻蛉上)

宮へわたらせたまふべかなるを。

(源、若紫)

さくさまへるざり入り給ふさまいとうひうひしげなり。

(源、末摘花)

京へつかはしたる大夫参りて。

(源、浮舟)

初瀬へまで侍ける道に佐保山のもとにまかり宿り侍りけるに。(拾、雑上)

「より」は動作、比較の基本點を示す。即、動作にては出自を示し、比較にては標準を示す。

動作の出自を示すものは時間的にいふあり。

あしたよりくもりてひるはれたり。

(伊勢語)

いわけなくより宮の内よりさひ出て身をも心にまかせず所せく云々。

今よりはそれよりものたまへ。これよりもきこえむ。

(源、梅枝)

今よりだに近くさふらひて御祈りもつかうまつれ。

(宇、國讓、中)

今よりだに近くさふらひて御祈りもつかうまつれ。

(宇、吹上、下)

雪よるよりいとたかうふりて。

(宇、樓上、下)

今日より四日かの物忌にやあらんと思ふにぞ少しのどめたる。(蜻蛉、下)

おとどもちごよりらうたくやおぼしつかずなりにけん。(落窪、一)

場所をさすあり。即、その動作を起す者又は人の所在、或は動作を始むる地點を示すあり。

其の柱と屏風とのもとによりて我がうしろよりみよ。

(枕、六)

はしよりいまわたりくるみゆ。

(源、寄生)

いわけなくより宮の内よりおひ出て身をも心にまかせず所せく、云々。

(源、梅枝)

今よりはそれよりものたまへ。これよりもきこえむ。

(宇、國讓、中)

柱のもとよりぞ見奉る。

(枕、六)

入道の姫君の御方に山よりとて名かきたまへり。

(源、夢浮橋)

これよりして動作の行はるゝ地點をあらはすことあり。これまた前期に同じ。

おいらかにあたりよりだになありきそとやはのたまぬ。

(竹、取)

前よりゆく水をば初瀬川といふなりけり。

(源、玉鬘)

蘆になひたる男のかたゐのやうなる姿なる此車の前よりいきたり。

(大和、語)

あじろははしらせたる人の門よりわたりたるをふと見るほどもなくすぎて
供の人ばかりはしるを。

(枕、二)

水は石かちなる中より湧きかへり行く。

(蜻蛉、上)

みなその月の上よりこぐふねのさをにさはるはかつらなるべし。

(土、佐)

いといかめしうて此としかげの家の前よりまうてたまふ。

(宇、俊隆)

おとは川まへよりながれてまへひろくせんさいおもしろく。

(宇、沖つ、白波)

垣の外よりおほちにふえふきてゆく人あり。

(蜻蛉、中)

頭しろきおうなの水くめるなんまへよりあやしきやうなる家に入りける。

(大和、語)

みそかなる所なれば門よりもえ入らてわらはべのふみあけたるついでにのくづれより通ひけり。
(伊勢語)

みなかちよりいてたまひぬ。
(宇、吹上、上)

君に馬は奉りてわれはかちよりくゝり引き上げなどしていづ。
(源、夕顔)

ことさらにかちよりとさだめたり。
(源、玉鬘)

ある一定の限界を有せるもの 範圍を示す場合あり。

これより東、娑婆世界より西に。
(宇、俊蔭)

年二十さいよりうちの人。
(宇、吹上、上)

ともかくもたがふべきふしあらんをのどやかに見しのばんよりほかにますことあるまじかりけり。
(源、帚木)

又限界を超越したる場合にもこの範圍をさすこともあり。

御心よりはたあまりけることを。
(源、橋姫)

枕より又しる人もなきこひを涙せきあへずもらしつるかな。
(古、戀、三)

それよりのち空はれたり。
(蜻蛉、下)

これより珍らしき事はさふらひなむや。
(源、帚木)

比較の標準を示すものはこの用法と同じ性質のものなりとす。

その人かたちよりは心なんまさりたりける。
(伊勢語)

ひとよりおとれる人の。
(保憲女集)

またこれよりまさりて人わらはれなるめをやみむ。
(源、明石)

なまなまの上達めよりも非參議の四位どもの世のおぼえ口をしからず、もとのねざしいやしからぬが。
(源、帚木)

例のたえまよりも安からずおぼえけむは何の心にかありけむ。
(蜻蛉、下)

神無月例の年よりも時雨勝なる心なり。
(蜻蛉、下)

一夜の心ばへよりは心弱げに見ゆるは。
(蜻蛉、中)

「からは頗る」に似たり。但、動作の基點を示すのみにして比較の標準は示さず。

これよりは靜止的に基本點を示すに「からはそれより移動をなしつゝあることを示す差あるによりてなり。時間的に示すもの。

こぞから山ごもりして侍るなり、こくだちなり。

(蜻蛉、下)

いつからある事にかあらむ。

(宇藏開、中)

若君のいとゆゑしきまてみえたまふ御ありさまを今からいとさまことにも
てかしづききこえたまふさまおろかならず。

(源、葵)

藤の花さきぬるをみて郭公まだなかなからまたるべらなり。

(貫之集)

心もとなきにあけぬから舟をひきつゝのぼれども。

(土佐)

浪の音のけさからことにきこゆるは春のしらべやあらたまるらむ。

(六帖、五)

たゞ今からけたかくきよらなる御さまを。

(源、玉鬘)

違ひてこれより文もなくのものしたればこれからよろしかめり。

(蜻蛉、下)

場所的に示すもの。

口からいとゆゑしき事をもきくかな。

(落窪、一)

一日も后宮からめすめりきや。

(宇、國讓、中)

此たびやがて竹の後からまひいでぬきたれつるさまどもの。
女のもとからいとあたなりといひたりしかば。

(枕、七)

めてたき事もわが身からこそと思ひて。

(九條右大臣集)

多くはわが心もみる人から治まりもすべし。

(源、帚木)

心からなどかかうき世をみあつかふらむ。

(源、末摘花)

かちからまゐりていひなぐさめ侍らむ。

(落窪、一)

これかれとふべき人かちからあるまじきもあり。

(蜻蛉、中)

二 副助詞

この期には副助詞の新に發生せるもの一あり。などこれなり。今之につきて
研究せむ。

先其が附屬する語につきてのべむ。

主語に附屬するもの。

心ひとつに思ひあまる事などおほかるを。

(源、帚木)

鬢つきいろいろはなとめてたし。

(宇、國讓、上)

高き山のいたゞきにひかげいほなどあり。

(宇、あて宮)

二の宮一の宮などまゐりたまふ時。

(宇、沖つ白波)

しばしありて臺などまゐりたれば少し喰ひなどして。

(蜻蛉、下)

には鳥の聲などさまさまなごうきこえたり。

(蜻蛉、下)

格助詞を「と」の代理したるもの。

繪などかきて色どりたまふ。

(源、末摘花)

をかしきものなどもて参りかよひたる。

(枕、二)

かつをなとくばりつ。

(宇、國讓中)

あいきやうあくれたる人のかほなどみては。

(枕、三)

いにしへゆくさきの事どもなどいひて。

(伊勢、語)

はこのふたに草子どもなどいれてもてゆくこそ。

(枕、九)

若菜籠に入れて雉子など花につけたり。

(土、位)

白馬やなどいへども心地すさまじうて七日もすぎぬ。

(蜻蛉、下)

今日は方塞がりたりければなんいかせんなどあべし。

(蜻蛉、下)

何事ぞなどあはつかになしあふぎゐたらむはいかがはくちをしからぬ。

(源、帚木)

格助詞の上にあるもの。

あふ阪などをさ思ひ返したらばわびしからんかし。

(枕、六)

世ばなれたる海づらなどにはひかくれぬかし。

(源、帚木)

あはれ光る源氏のいはゆる御盛りの大將などにははせしころ。

(源、紅梅)

今あしこにもさむらはむなどとかへりたまひぬ。

(宇、藏開、下)

それより後除目などとして音なし。

(蜻蛉、下)

遠きところ人の國などより家のあるじののぼりたる。

(枕、十)

格助詞の下にあるもの。

京になど迎へたまひて後。

(源、蜻蛉)

心知らむ人になどこそきし侍りしか。

(源、紅梅)

京へなどむかへ奉らせたまへらむ後。

(源浮舟)

係助詞の上にあるもの。

雨のふりたるつとめてなどはなべてならぬさまにをかし。

(枕 三)

今は面なれたる事などはいかにもいかにも思はぬに。

(蜻蛉下)

佛舍利玉帶銀造太刀尺鏡ナトモ有リ。

(天滿託宣記)

琴などもならはする人あらば。

(落窪 二)

御せうそこをかしきもの杯もて参り通ひたるなどもめてたし。

(枕 十一)

女房などもかの御かたみのいろかへぬもあり。

(源 幻)

さしもうけひかずなどぞおはする。

(枕 三)

夜などぞさおぼめかむはあしかりぬべけれど。

(枕 三)

宰相の君などぞちかくはある。

(枕 六)

云々などなんまめやかに美しげなりける。

(落窪 二)

その人の日記などなんそのなかにはべりし。

(宇藏開上)

さくらははむくのはなどこそいとくはおつれ。

(枕 九)

庭などもいと蓬しげりなどこそせねども。

(枕 八)

此へいだんもてくるにはものなどやとらすらむ。

(枕 七)

他の副助詞と重なるもの。

はかなうふみつけなどにせず。

(枕 三)

御こしのかたびらのいろつやなどさへぞいみじき。

(枕 十一)

ゆくさきの身のあらむことなどまてもおぼしめす。

(源若紫)

只今はこの大夫を人々しくてあらせ給へなどばかりを申したまへ。

(蜻蛉下)

云々などばかりのたまへおく。

(源寄生)

儀式など例にかはらねどこの世の有さまをみはてずなりぬるなどのみおほ

せば萬につけてものあはれなり。

(源夕霧)

副詞の下に附屬するもの。

などかかくなどのたまはざりし。

(宇國讓中)

さてなどこれかれとふなり。

(蜻蛉中)

日ごろさなどいはず。

(蜻蛉上)

あながちになどかゝつらひまとはゞ倒るゝ方に許したまひもしつべかめれど。

(源、螢)

ほのかになど見奉るにもかたちのまほならずも座しけるかな。(源、少女)

のの上にある連體語に附屬せるもの。

(枕、三)

うりんゐん知足院などのまへに。
樂人舞人などのことは大將の君とりわきて仕うまつりたまふ。(源、夕霧)

(宇、吹上、上)

くすりかうなどをいひなどのさまにいて。

「やう」といふ語の上に存することすくなからず。
いてあなかなしかくはたおぼしなりにけるよなどやうに相しれる人々きとふらひ。

(源、帚木)

いちめなどやうのものいとよくもてなし。

(源、玉鬘)

五葉、紅梅、櫻藤、山ぶき、岩つゞしなどやうのもの。

(源、少女)

よべ後れてもて參れる絹綿などやうのもの阿闍梨におくらせたまふ。

とのもづかさゑなどやうなるものをしろきしきしにつゝみて。(枕、七)

千賀のしほがまなどやうの御せうそこ。(枕、十一)

しをんなでしこの濃き淡き和どもに女郎花のかざみなどやうの時にあひたるさまにて。(源、野分)

形式動詞の客語たるものに附屬するもの。

さて日晴れなどして縣ありきの所にわたりたれば。(蜻蛉、下)

いにしへのことかたりいてうちなきなどしたまふ。(源、末摘花)

君をもわが身をもいはひなどしたるさまことにをかし。(枕、一)

扇をうちならしなどするに。(竹、取)

大將の女御の君と御恭あそびしなどするに。(宇、沖つ白波)

琴おしのごひてかきならしなどするに。(蜻蛉、上)

ひきいりしづみなどすれば。(源、夕霧)

用言の重なる間に入るもの。

げにいと思ふさまなるつぼねしいてすゑなどあつかひありく。(狭衣、四)
などかくはあるぞとて湯をせめて入るれば呑みなどして見などなほりゆく。

(蜻蛉、上)

「などは下に」と助詞を伴ふこと稀なり。即といふ助詞の必あるべきさまなる處にても多くは略するなり。

あしたづの雲のなかにまじりなば、などいひて。

(小町集)

人さまもよき人におはすなどいひたり。

(竹取)

翡翠などいふらむやうに。

(濱松語)

梨花一枝春雨をおびたりなどいひたるは。

(枕、三)

誰などいはするにはおぼつかなからずさわきわひたれは。

(蜻蛉、上)

あなたに人のこゑすればそゝなどのたまふに。

(蜻蛉、上)

日くれぬなどそゝのかす。

(蜻蛉、中)

僧めせなどさわぐを。

(源、神)

殊に面白きは通例などといふべきをなどといへることなり。こは蜻蛉日

記、宇津保物語に甚多し。少しく例を示さむ。

などかう久しうはありつるなどて、手をとりにて。

(蜻蛉、上)

つれつれなるこゝろになればにこそあれなどて、とてもかくても。

(蜻蛉、中)

明日春日の祭なればみてぐら出したつべかりければなどて、うるはしう引き
さうぞき御前駈數多ひきつれ、おどろおどろしうおひちらしていづる。

(蜻蛉、下)

思ひたまへつるぞやなどて夜ひとよあそびあかして。

(宇、祭の使)

ひくごとに千とせのかげをそふる松いくよかぎれるよはひなるらむなどて

(宇、祭の使)

たてまつれたまひて。

云々などて同じやうなる御ぞぬぎてたまふ。

(宇、祭の使)

いとかしこしと思うたまへるをなどてかへりぬ。

(宇、吹上、上)

君とはばいかにこたへむ濱にすむ千どりさそひにこしみやこどりなどてよ
一よあそびくらす。

(宇、吹上、上)

春の色のみぎはに匂ふ花よりもその藤こそ花とみえけれなどてあそびくらす。

(宇、吹上、上)

それもおとなしきこゝろつきたまふめればさおぼすやうもあらむなどてさ
らばこのあこたちはけふもいさかし。

(宇、國讓、下)

又、なんどといふ形あり。

さだめたるさとなんどもまうけたまはざるを。

(宇、藤原君)

おなじはらからを民部卿の中將なんどをばすませたまはずや。

(宇、藤原君)

とかくなんどみつゝふるほどに。

(宇、蜻蛉、中)

さもけしからぬ御さまかななんどいひつゝもろともに見る。

(宇、蜻蛉、上)

今これらによりてこの語の由来を考ふるにはまさに「なにと」との熟合したるものなるべし。「なにと」が音の便宜にて「なんど」となるべきは見易き事にして、更に「など」となるべきはこれ亦自然の勢なりとす。「なには」代名詞として汎稱をなすものなれば一二の事物を擧げて例として、他を略して「何々」といふ意を以て慣用せ

られたるものなるべし。かくいふは全く架空の議にあらず、間投助詞の「や」にて枚擧する實例としてあげたるものを見よ。

わりごや何やとこなたにも入れたるを。

(源、寄生)

みさゝきやなにやとさくに。

(蜻蛉、上)

わりごやなにやとふさにあり。

(蜻蛉、中)

扇や何やと拍子にして。

(枕、五)

又次の如くいへるもあり。

みのも何もなみだのかゝりたる所はちのなみだにてなんありける。

(大和、語)

鬼もなにもくひてうしなひてよといひつゝ。

(源、手習)

なにはづもなにもふとおぼえむ事をかけとせめさせたまふ。

(枕、一)

とのゐものもなにもうもれながらある上におはしまして。

(枕、三)

めてたきものえび染の織物すべて紫なるはなにもなにもめてたくこそあれ
はなも草も紙も。

(枕、五)

何もなにもちひさきものはいとうつくし。

(枕、八)

かく意義の上にては、なにの性質を帯べることを知るべし。形體の上よりいへば、そのとに伴はること稀なることの外に著しくとの性質を具せるを見る。そは、とはすべて終止的用法にたてるものをうくる性質あるものなるになども亦然る事なり。

雨などふりたる日暮に來むなどやありけむ。

(蜻蛉上)

いと胸痛きわざかな世に道しもこそあれなどいひのゝしるをきくに。

(蜻蛉上)

すゝろはしやえせてわろからんをだにきかめなど定めて。

(蜻蛉上)

これかれいと情なしあまりなりなどものすれば。

(蜻蛉上)

人はつれなう我やあしきなどうらもなう罪なきさまにもてないたれば、いか
とはすべきなど。

(蜻蛉上)

例のほどにものしたれどそなたにもいはずなどあれば。

(蜻蛉上)

堪へがたくとも我宿世の怠にこそあめれなど心をち々に思ひなしつゝ。

これぞかの宮かしなどいひて人を入る。

(蜻蛉上)

(蜻蛉上)

いと便なかるべしなどものして。

(蜻蛉上)

いづれの國とかやみみらくの鳥となんいふなるなど口々かたるをきくに。

(蜻蛉上)

みづからきこえぬがわりなき事とのみなんきこえたまへなどぞある。

(蜻蛉上)

いかにせむなど思ひなげきて十餘日にもなりぬ。

(蜻蛉上)

端の方にあゆみいてて幼き人をよびいてて我は今はこじとすなどいひ置き
て出てにける。

(蜻蛉上)

かう物はかなき身の上も申さむなど定めていと忍びたる所にもものしたり。

(蜻蛉上)

まうてこそすべかりけれなど定むるほどに。

(蜻蛉上)

蜻蛉日記上卷のみにての例だにかくの如し。これを以て考ふれば、いよく「と」の

性質を有することを知るに足る。

土佐日記十二月廿七日の條に流布本は

これかれ酒などもておひきて

と貫之自筆の本を定家卿のうつせる本といへるには、なにとありきといへり。さらば、なか／＼この説を助くべきなり。

之を例として察するに、だに「さへ」などいへる副助詞の本質も亦大やうは推測せらるべし。先「だに」には必格助詞の「に」の退化したるものなるべし。そは如何にといふに、この助詞は決して下に格助詞を伴はず、これ他の副助詞と異なる點とする所なり。これその意義上性質上明かに依立の「に」の性質の残留せるを證するものにあらずや。この故にこの語原を「たゞ」にならむといへる説の最中れるに近きものなるを知るべし。多くの副助詞は或はかくの如き手續によりて發生せしものにあらざるか。

「だに」の用例。

主語に附屬するもの。

松の雪だにきえなくに。

(古、春、上)

その人だにえき／＼つけてなにとかなにとかと耳をかたふくるに。

(枕、九)

數ならぬかげまさだに女はみまほしくしらまほしくなんあるを。

(落窪、三)

はかなき事だにかくこそ侍れ。

(源、帚木)

かゝる心だにうせなばいと哀となん思ふべき。

(源、帚木)

雨だにふれば。

(枕、十一)

そのものと思ひ出づべきたよりだになくぞありけるかし。

(蜻蛉、上)

わがむこの君だに心とめたまはと。

(宇、吹上、上)

格助詞の代理したるもの。

枕だにせてねしものを。

(古、戀、三)

家のあたりだに今はとほらじ。

(竹、取)

母御息所はかげだにおぼえたまはぬを。

(源、桐壺)

慎ませたまふべき御年なるにはればれしからて月頃すぎさせたまふことだ
に歎きわたり侍りつるに。

(源薄雲)

格助詞の下にあるもの。

例のかたみを見え奉る。をだに仕うまつるに。

(落窪四)

志をだに見え奉らむと。

(宇沖つ白波)

わが君をだにこそは御かたみに見奉らめ。

(源玉鬘)

女御とだにいはずなりぬるがあかずくちをしうおほさるれば、今一きざみ
の位をだにとておくらせたまふなりけり。

(源桐壺)

葉をだに人の見るめる。

(枕三)

ぬかつきなどいふものゝやうにだにあれかし。

(枕三)

六條わたりにだにかれまさりたまふめれば。

(源末摘花)

ろうさうなりとも雪にだにぬれなばにくかるまじ。

(枕十一)

もろこしにだにきこえあなり。

(源玉鬘)

歸るべからむ日きゝて迎へにだにとぞある。

(蜻蛉上)

いかにぞとだにとひふれざなり。

(蜻蛉中)

この世の人とだに思ひたらず。

(枕三)

あたりへだによせられねば。

(宇國讓中)

今よりだに時々立ちよらせたまはずば心うくなむ。

(落窪三)

あたりよりだになありきそ。

(竹取)

よし、今よりだによういしたまへ。

(源少女)

もとよりだにとりわきたりし御おぼえなりしかば。

(狭衣四)

係助詞の上にあるもの。

さしもしのひところなき人だにもあはれなるべきわざなるを。(狭衣二)

日をだにも天ぐもちかくみるものを都へと思ふ路のはるけさ。(土佐)

ことをだにちかくだにぞみざりつる。(宇國讓中)

耳をだにこそとどめ侍らざりつれ。(源橋姫)

わが君をだにこそは御かたみに見奉らめ。(源玉鬘)

有様も人のほどもひとしくだにやはある。(源若菜下)

なほかくだになおぼしいてそ。

(源、夕霧)

副助詞と重なるもの。

かもめさへだになみとみゆらむ。

(土、佐)

女をおもひすましたる僧だちなどだに涙もえとめねば。

(源、若菜、上)

思うたまへてなん今日までだに侍る。

(落窪、四)

別のかなしみにこゝまでだにまゐりつるなり。

(宇、俊蔭)

この御琴のねばかりだにつたへたる人をさをさ侍らじ。

(源、若菜、下)

客語を助くるもの

わかき女房などはうごきだにえせずしに入りたるやうにて。

(狭衣、三)

苔の袂よかわきだにせよ。

(古、哀)

何ばかりの程にもあらぬなからひにだにし侍るをかの人御ためにもいと

かたはなることなり。

(源、少女)

珍らしう御心移るかたのなのめにだにあらず人にすぐれたまへる御ありさ

(源、楨柱)

まよりも。

修飾語に附属せるもの。

今しばしだにおはせなん。

(落窪、三)

今だになのりしたまへ。

(源、夕顔)

こよひさへさだにあらば。

(狭衣、三)

今だに御中よくてものしたまへ。

(宇、國讓、中)

今しばしかくだにあらば浪にひかれて入りぬべかりけり。

(源、須磨)

用言の重なる中間に入るもの。

更に入れだにいれずなどいへば。

(落窪、三)

御らんじだにあくらぬおぼつかなさをいふ方なく悲しとおぼさる。

(源、桐壺)

よそにては思ひだにおこせたまはと。

(源、楨柱)

覺しだにしたらば慰む方ありぬべくなむ。

(源、藤袴)

きゝだにあはせてやみぬるいぶせさよ。

(狭衣、一)

あまりうれしき事はいひだにこそいでられざりけれ。

(狭衣、三)

「さへは其の語原そへなるべしと稱せらる。或は然らむ。されど之を證明するは容易にあらず。その例次の如し。

主語に附屬するもの。

いでや君にためいんすることさへかざりに覺ゆるこそいみじう悲しけれ。

(宇、あて宮)

姫さへとゞまらむ事を耻と思ひてまうづるに。

(落窪、一)

これにさへはらさへ立ちぬれとぞある。

(和泉記)

香さへなつかし山吹の花。

(古、春、下)

ある人の毛のあなさへ見ゆるほどなり。

(竹、取)

まけてはやまじの御心さへそひて。

(源末摘花)

この君さへかくおはしそひぬれば。

(源桐壺)

ところどころの御さじき心々にしつくしたるしつらひ人の袖口さへいみじ

き見ものなり。

(源、葵)

かゝるかたみさへなからましかばとおぼしなぐさむ。

(源、葵)

格助詞の代理するもの。

人のためさへからきことありかし。

(源若菜上)

みこさへうちぐし奉らせたまひて。

(狭衣、一)

「に助詞の上にあるもの。

いろさへにこそうつろひにけれ。

(古、秋、下)

ゆるかけさへにくれぬとちもへば。

(古、冬)

夢路をさへに人はとがめじ。

(古、戀、三)

鶯のなくねさへにはかはらざりけり。

(拾雜春)

ことのはさへにうつろひにけり。

(古、戀、五)

年のうちに春たつことをかすが野のわかなさへにもしりにけるかな。

(貫之集)

深みどり松にもあらぬあさあけの衣さへにぞしづみそめけむ。(順集)

この「に助詞は恐らくは格助詞なるべし。而さへは本來副詞なるべく、その經行は

「だに」と同一出發點を有せるものならむ。かくて「だに」を融化し了り、「さへ」は「に」

を脱落し去りたるものなるべし。さるが故に「さへは」にの上に来ることあり「だに」は來らず、しかもいづれも他の格助詞の上に立つことなきならむと思はる。なほこの研究は別に語原研究及同族語との比較研究に俟つべきものにしてこゝにはたゞ一の豫示をあぐるにすぎず。

格助詞の下にあるもの。

さすがにわがみすてん後をさへなんおもひやりうしろみたりし。

(源、帚木)

いにしへの御事をさへとりかさねて。

(源、推本)

たまもをさへやあまはかつかぬ。

(後、戀三)

涙をさへなんおとし侍りし。

(源、帚木)

涙をさへこぼしてふしたり。

(源、空蟬)

夢ぢをさへに人はとがめじ。

(古、戀三)

琴のこゑにさへはかなく人の戀しかるらむ。

(古、戀二)

夢にさへ人めをもるとみるがわびしさ。

(古、戀三)

これにさへはらさへたちぬれとぞある。

(和泉記)

こよひしもさふらはてめしにさへおつるを。

(源、夕顔)

うき事いひいづるたぐひもきこゆかしとさへおぼしよるも。

(源、若菜下)

係助詞の上にあるもの。

昔を傳へたらむことさへはなどてかさしも。

(源、寄生)

けふよりは夏の衣になりぬれどきる人さへはかはらざりけり。

(後、夏)

かばかりの事さへもこよなくさふらふものかな。

(狭衣、二)

ことならはことのはさへもきえななむ。

(古、哀)

身をなげむ方さへぞなき。

(宇、菊の宴)

文王の子武王の弟とちちずしたまへる御名のりさへぞげにめてたき。

(源、賢木)

わがみすてむ後をさへなんおもひやりうしろみたりし。

(源、帚木)

涙をさへなむおとし侍りし。

(源、帚木)

あほぞらさへこそなどきこえたまふ。

(宇、菊の宴)

よそにのみまつはかひなきすみのえのゆきてさへこそみまほしけれ。

(後戀二)

鶯のきゐつゝなければ春雨にこのめさへこそぬれてみえけれ。

(貫之集)

文のみちさへやはとしかけ女子にをしへけむ。

(宇吹上下)

住のえの岸による波よるさへや夢のかよひぢ人めよぐらむ。

(古戀二)

副助詞と重なるもの。

かもめさへだになみとみゆらむ。

(土佐)

人の御ためさへなどおほしいづるに。

(源澤標)

かゝるさまの人かげなどさへたえはてむ程。

(源橋姫)

修飾語に附屬せるもの。

あすさへふらばわかたつみてむ。

(古春上)

君いまさへこのびはひきたまふは。

(宇樓上上)

かくさへなりたまへるものを。

(狭衣一)

「すらはこの期には稍勢力を失ひたるにか。多くは歌にのみみえて、しかも用例

多からず。

主語に附屬せるもの。

草木すら春にはなべてあふさかの。

(躬恒集)

係助詞の上にあるもの。但もの上にある例のみを見る。

ゆくへすらもおぼえず。

(竹取)

鬼すらも都のうちとみのかさをぬぎてやこよひ人にみゆらむ。

(躬恒集)

さけといふいをの冬いてくれは北へなかるゝ水すらもともせり。

(保憲女集)

格助詞の上にあるもの。但にの上にある例のみを見る。

道すらにしぐれにあひぬ。

(貫之集)

修飾語に附屬せるもの。

春日すら長居しつると妹とはいみせむと折れる花ならしそ。

(順集)

春日すら我まつ人のこしとだにいはずはあすもなほたのままし。

(貫之集)

たなばたのまぢかけにするこよひすらなにたちさわく天の川なみ。

(高光集)

しばしこゝろみてすらときもせんかしと思ひつゝくるに。

(蜻蛉中)

これらを以て察するに、すらは前期の遺物にして多くは歌にその慣例をとゞむるのみのものか。若くは、當時の標準記載語としては勢力を失ひたるものならむ。今、漢籍の訓讀に存するも亦保守的勢力のこの漢籍訓讀の中に存するが故ならむ。

「のみ」

主語に附屬するもの。

おもふ事の[〓]みしげし。

(蜻蛉上)

御胸の[〓]みふたがりて。

(源桐壺)

尼君の行ひの具の[〓]みあり。

(源寄生)

格助詞の上にあるもの。

かくての[〓]みを今はものしたまへ。

(宇國讓中)

すさまじきの[〓]みにものあらずわりなし。

(枕二)

けふの[〓]みと春を思はぬ時だにもたつことやすき花のかけかは。(古春下) 格助詞の下にあるもの。

世のなかのあはれに心うき事をの[〓]みおぼされければ。(落窪一)

今こむといひてわかれしあしたより思ひくらしのねをの[〓]みぞなく。

寺にいそぎにの[〓]み心を入れたまへり。(古戀五)

よそにの[〓]みあはれとぞみし。梅の花あかぬ色香は折りてなりけり。(源寄生)

君にの[〓]みあはまほしの夕されば空にみちぬる我が心かな。(古春上)

みよしの山べにさける櫻花雪かとの[〓]みぞあやまたれける。(六帖一)

云々となん思ひ侍るとの[〓]みのたまへば。(古春上)

女房などはすべて年の内つごもりまでもあらじとの[〓]み申すに。(枕四)

係助詞の上にあるもの。

あくといへば静心なき春の夜の夢とや君を夜の[〓]みはみむ。(大和語)